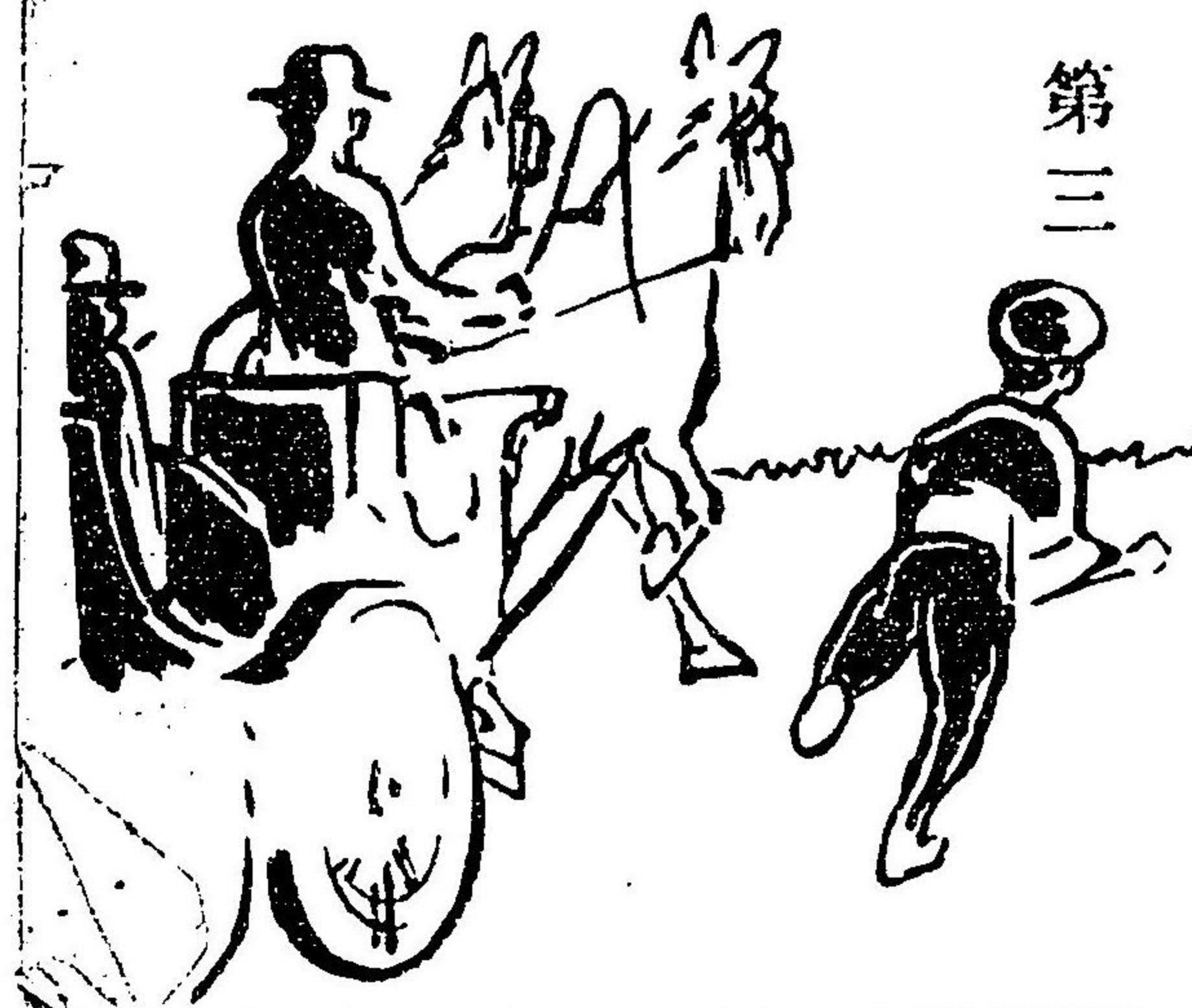


82
447

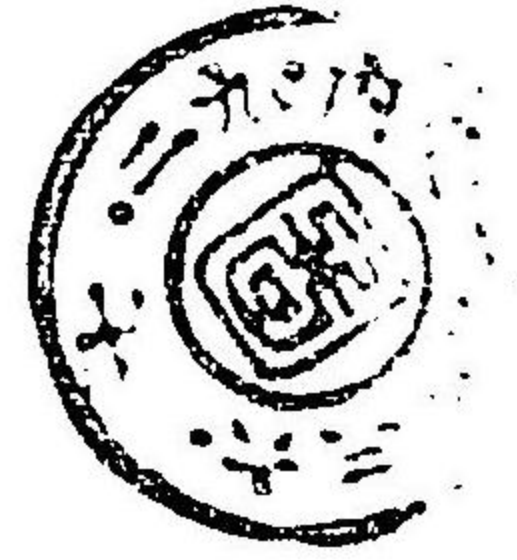
名家訪問錄

第三



猫

作



君成長田黑爵侯



君信重隈大爵伯

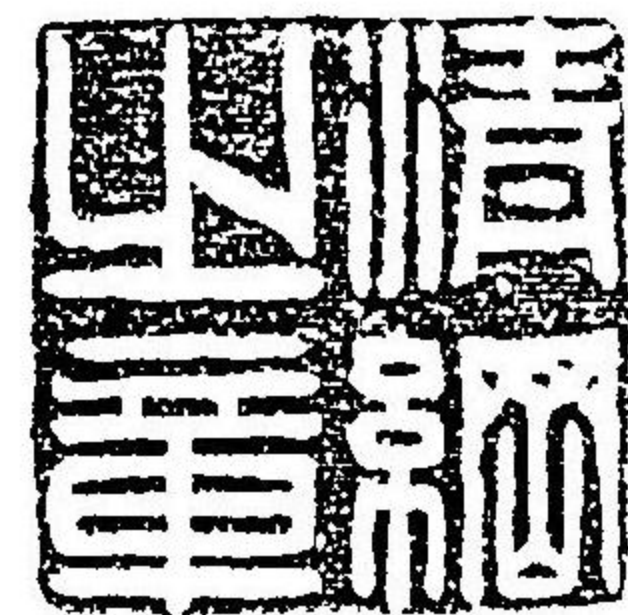


君吾奎浦清爵男



君一隆鬼九爵男

清經





下阪三九 國權法

燦星之論 兼深程

石川君見示 爲家坊向 叙以若一 聯

啓

湖山八九卷 史



緒言

凡そ學術技藝の眞訣を知らんと欲せば、必ず先づ斯道に精通し蘊奥を極めたるの士に就きて其の所見を叩き、初めて克く其の倚る可き所を知り、而して漸次堂に上るの階梯となす可きなり。

余本社發刊の諸雜誌速記事務を擔任し、常に名門に出入し、高論卓説、聞くに従つて焉を録し、稿を成せるもの、題して名家訪問録と云ふ、而して第一集は明治三十五年六月に、第二集は同八月に公刊し、今や亦第三集を公にするに至る。

卷中載する所は、清浦法相の法制談、大隈伯主張の學問の獨立、黒田侯爵の菅公會始末、九鬼男爵の美術談、小出先生の歌の話、中井先生の印學、三井先生の謠の話、橋本、今尾、竹内、山元四畫伯の繪畫に對する創見、内垣、本

因坊二大家の圍碁談等、悉く名家が獨特の奧秘を闡明したるもの、論議明快、趣味深厚、頗る後進を裨益するものたるを疑はず。然り而して余の淺學非才なる、時に或は誤聞若くは文字の錯誤等より、論議の徹底せざる所なきを保せず、これ畢竟余が文才に乏しきの致す所なれば、敢て其の責を演者に歸すると勿かれ。

明治三十六年七月

編者 石川松溪

名家訪問録第三集目次

○法制小話

司法大臣 清浦奎吾君……

法律の規定 法典の主義 法律の適用

法曹社會に對する希望

○學問の獨立

伯爵 大隈重信君……

専門學校の創立 第一の希望 第二の希望

模範的學校

○菅公千年祭始末

貴族院副議長 侯爵 黒田長成君……

菅公祭の因由 有力者の賛成 菅公會と豊國會

教育家の賛成 一千年大祭 菅公の誠忠

菅公の徳操

○美術談

男 樞密顧問官 九鬼隆一君……四

美術の歴史 風土と美術 革命と美術

日本文明の持続 推古以後の美術 足利及豊臣の美術

徳川のみ術 奈良の大大術 信實應舉の畫卷物

日本の美術國是 心術の修養 正倉院の珍寶

巨勢金岡の名畫 美術と貿易 美術と殖産

楠公の銅像

○歌道 御歌所寄人 小出 榮君……三

戀歌 近作 新派と舊派

眞詠 題詠

○印學 中井敬所君……二

三代の印 秦漢魏晉の印 六朝以後の印

明 清

○謠話 三井得右衛門君……三

由來 修業 晩學

楠の露 御國の光 盲目の謠

○繪畫の將來 橋本雅邦君……三

當今の繪畫 繪畫の變遷 其の癖を習はず

是眞の雅量 將來の繪畫 古永徳の活潑

○繪畫の現在 今尾景年君……四

青年畫家の邪道 運筆と寫生 畫は精神

光線意匠は第二

○繪畫の將來 竹内栖鳳君……四

日本畫は早洒落 基礎の研究 想像の力

墨畫の妙美

眞理の探究

○繪 畫 論

書 伯

山元春舉君…二頁

繪畫の着想

繪畫の教育

日本畫の缺點

日本畫の長所

○圍 碁 の 話

外務省會計官 五段

内垣末吉君…二頁

中世後の圍碁

古人の格言

定 石

名人の碁

名人逸話

閱 歷

○圍 碁 の 話

家 元

本因坊秀榮君…二頁

初學者の心得

書 物 家 元

御 城 碁

盤 石 段

電報電話碁

名家訪問録

第三集

司法大臣男爵 清浦奎吾君の談



類がこの世の中に共存して共に生活をして行
 ら此の吾人が生存する社會が段々と發達して行くその段階に隨つて、
 段々と進歩變遷して行くものであります昔は習慣が一の法律となつ
 てありましたがこれが段々と進化して成文法となり行くやうになり、
 又千切れ々々の單行法であつたものが民法刑法商法訴訟法等集めて
 大成したる法典時代に移ると云ふものはこれは形式の上の進歩を示

二
すものであります。其の法律の内容と云ふものも矢張り世の進運に連れて進歩しつゝあるもので、特に古は法律には民法刑法といふが如き區別はなく、其の規定といふものが多く刑事に屬して居つて、民事に關係したとは豫め規定を設けてあるものは稀であります。是れ畢竟刑法と云ふものは社會の秩序安寧を維持するもので、消極的のものであるが、民法と云ふものは國家社會の利益を増進し、個人の權利發達を主眼とする所の積極的のものである。夫故にこの二者は兩つながら共に一發達しなければならんとは勿論のとてあります。其の間には自ら前後緩急の差違があります。夫のみならず封建制度の時代には、法律と云ふものは爲政者即ち治者の參考の資けとなす可きものと思つて居たもので、被治者即ち人民に知らしむるの必要はないものと云ふとてあつた故に、日本に於ても或る御布令御掟書の外には、規定したものは殆んどなかつた。即ち「法は由らしむべし、知らしむ可からず」と

云ふ原則の下に、爲政者即ち役人だけこれを知つて居つたもので、法律と云ふものは誠に混沌たる状態であつて、人民は僅かに其の土地に於ける先例又は舊慣を以て其の行爲の標準とする外には仕方はなかつた。併ながら其の時代も法律が無かつたのではない。只法律が完備しなかつたのであります。假令法律の明文がなかつたからと申しても、先例習慣又は爲政者の意思が即ち法律であります。之を要するに吾人々類が相集つて部落を爲し、或は國家を形成して共同生活を営む場合には必ず法律の存在を認めるものである。

法典の主義

法律規則の規定と云ふものは其の始めに於ては多くは前陳のやうな状態でございますけれども、人文が段々と進歩し世運が發達するのに従つて、法律規則の制定と云ふものは愈よ益す複雑繁多になつて年月

を經過するに従つて増補改廢も鮮からんこととて、夫が爲に種々紛はしき事もあり錯雜して來るから其の局に當つて法を取扱ふ人は悉くこれを知り又はこれを索り覽る等の便利を失ひ、民人は其の從ふ可き所に惑ふやうになる。此に於て法典編製と云ふ必要が起つて來るのである。

輓近の法典といふものは、管に形骸の著しく整頓したばかりでなく、然と發達したる法理に基いて務めて原則を擧げるやうにし、綱目を掲げて置いて、學者の意見司法官の解釋に一任した餘地といふものは頗る廣いのである。これが法典編纂上一段の進歩であつて、條文も又著しく減少したのである。例へば佛國民法は二千二百八十一條あり、獨逸民法は二千三百八十五條より成立て居るけれども、日本の民法は一千四百四十六條で成立て居るやうなものである。

民法商法の如きは假令如何に浩瀚なる規定を設くるも、法律の明文を

以て萬般の事物に應用し、正條を以て一切の訴訟に適中する規定といふものは到底設け得るとは出來ない。或は歲月を經過すると同時に時運の進歩と伴はない所が出來て却て法文の老朽を招き易きとがある。夫故に法律の適用を敏捷に能く時世に恰當させやうと思ふには法文は務めて細目に涉らないやうにし、學說を掲げないやうにするのが最も肝要なとであります。これが我日本民法の採用した主義であつて、他の諸法典とは較やその趣を異にする所である。斯かる法典を運用する當局者又これを講究する所の學者の責任は一層重大なものとなればならぬ。

法律の適用

法律を草案するものはナカ／＼一通りの困難ではありません。或はこれを法理に照し、或はこれを習慣に鑑み、又或はこれを現行の諸法令

に參考し、時世に適當したる規定を設けなければならぬ。夫れ故に此の法律の起草をなすの容易ならざるとは固より明瞭である。併ながら此の法律の適用といふことも又至極困難なものである。假令法律が如何に最新の學理を網羅して金科玉條を連ねてあつた所が、これを運用する場合に於て巧妙を得なかつたならば、法律はその目的を達し得ないのみならず、却つて社會の利益を沮害するやうなことになります。司法官たり辯護士たるものは此の法律を解釋してこれを適用するのが常職でありますから、其の適否如何に依つては一般人民の利害休戚を感ずると甚だ多大なるものであれば、其の責任は決して學者が意見を陳述するの比較となるものではない。

法曹社會に對する希望

茲に余は法曹社會に向つて注意をしたいと思いますと思ふとがある。我日本て法

典を編纂したのは、英米獨佛諸國とは少しく其の趣きを異にして居るとである。我國も開闢以來二千五百有餘年の長日月を経て其の間夙に文物燦然たる國家を形成したものであるから、日本固有の法律といふものは成文法と不文法とを問はず、嚴然として存在したとは蓋し疑のないとてあります。然るに明治維新の大變革といふものは、鎖國攘夷の主義を一變して開國進取の國是を採つて、廣く内外の新智識を取り、國政を革釐した結果社會の狀態も亦一變して參つたから、到底舊法を以て人民を標準とするのが出來なくなつた。夫れ故に法典を編纂するには歐洲各國から採つて以て我國の法としたとも澤山ある。この點が獨佛諸國に於て羅馬法を繼承したとは異なる所である。彼の獨逸佛蘭西の如きは、假令羅馬帝國は瓦解するとも尙ほ羅馬法は社會民人に効力のあるものとして久しく人民及執法官の規準となつて居つた爲に、法典を編纂せんとする時にも民族固有の慣習法の外に、羅馬法を參酌し

て法典に加へたけれども彼の國人民は新法の爲に甚だしく従前と差異ある羈束を受けたとはない併ながら日本に於てはこれと反對に彼の維新の革新に於て社會の有様が急劇に一變したために法律の多數と云ふものは全く舊法を殘さなかつたもの又は多く舊法を改正若くは廢止した法律であつた故に民人は茲に於て更に新規なる所の羈束を受けるととなつた。

夫故に社會の進歩した程度と法律の規定した所と果して權衡を得たであらうかと云ふ點になると甚だ疑はしいのであります又近頃にも或る法律は餘り學理にのみ拘泥したもので吾人々類社會の實益を顧ない法律であると云ふ非難もある又或る法律は社會の進歩に伴はないで老朽して仕舞たと非難するものもある又或は法律は司法官が新法令の實施に當つて往々その運用を誤り其の判決の如き失當のと多くこれ即ち法官が運用の不熟練に依ると云ふ非難もある特に治

外法權を撤去した結果例の國民の渴望せる對等條約に依つて外國人が我が法權の下に服従するやうになつた爲に我が司法機關并に其の運用に就いて非難するものがある但し是れは彼我制度の同一でない習慣の異なるのであるから多少の非難は免かれ難いとであらうけれども要するに法曹の間に於て他山の石として參考の資けとなるものもある取分け英國では例の不文法國であるから法律は判決例の彙纂と云ふやうなもので即ち判決例が相集つて法律を爲したものである夫故に司法機關の組織や法律の形骸は不完全であるけれども而も能く其の時宜に應じ民情に適して居るとは英國の特徵である。夫て日本の司法官は其の職務を取る公平無私であつて尙且職務に忠實である點は比較的世に非難せらるゝとはないが動もすれば其の事情に迂濶であつて要領を得なかつたり又方式に齷齪して遷延に流れ時として訴訟人に少なからざる迷惑をかけることがある特に商事上の

訴訟即ち爲替訴訟手形訴訟のやうな最も迅速を要する事件が折々駿速に運ばなかつたり夫が爲に商機を失して損失を醸すとも少くない或は又裁判の執行が不完全であつたために訴訟者の利害が相償はないと云ふ非難もある是等の事柄をば悉く司法官辯護士の無經驗疎濶懶惰にして而も訴訟手續の煩雜にして鄭重に失する罪として論ずるものもある之れが救済の手段として商事に關係すべき特別裁判所を設け商法及商慣習に通達する判事及陪審官を撰任して其の局に當らしめやうと主張するものもある是等の議論悉く首肯すべからざるとではあるが又頗る我法曹界の参考となるのである之れを要するに法律といふものは社會の爲に存するものであるから時宜に能く適中し能く之れを制裁して以て能く民人の利益を保護するを主眼とするのであるから法律の運用に任ずる所のものは務めて事情に精通して法文の適用をして世の狀態と一致せしむるやうに注

意し一面に於ては深遠なる法理を探究するとを怠らざると同時に一面には事件の真相を穿ち成可く迅速に裁斷の結果を得るやうに務めたいものである又務なければならぬものであります

學問の獨立

伯 爵 大隈重信君

専門學校の創立

吾輩は大學者でもなし博く内外の學を講じたと云ふ譯ではないが教育と云ふ事は従前から遣つたので慶應年間に一の英學校を長崎に有つて居つたが明治の維新になつてから官吏となつた故に種々と管理すべき用が多くなつて學校の世話が出来ないので英學校を二三の人に托した所が英學校は遂に維持する事が出来ず明治三年に閉校する事になつた其の學校には外國人も雇つてあつたが此の人等をば夫々

東京に来るやうにして遣つた夫から丁度明治十五年に閑散の身軀になつて早稻田に専門學校を開き、二十年の星霜を経て今年早稲田大學に迄進んで、専門學校附屬中學校、附屬實業學校が出来て、殆んど此所に三千人の生徒が居る。私が自から書生に講義すると云ふ譯ではないが、余の從來教育に熱心なる所より自分の餘暇には成だけ人の世話をしたものだ。が、ドウセ世話をするなら學校にして見やう學校にして見ればその學校を盛にしやうと云ふので遂に此所に至つた。始めは夫程意味はなかつた。

凡そこの人は一の欲望——希望と云ふものがある。これを極く平易に申せば、缺乏から起る慾。所謂その缺乏を満さうと云ふ點から起るので、飢ては食を得やうとし、飢たる缺乏を満さうとする慾が起る。自分は學者ではないが併し支那西洋の學問を遣つて見ると、學べば學ぶ程自分の缺乏を感じて來た。夫故に、自分もカウてあれば人もサウてあらうと

云ふ譯から成だけ學問の世話をして多くの人の缺乏を満す事を勤めやうと云ふ欲望から、専門學校を起したので爾來教育に向つて殆んど二十年直接自分が鞭を取て人を教ふるのではないが國民をして此の缺乏を満す事を勤めやうと云ふ一種の欲望から斯る事柄を遣り來つたのである。

そこで一の目的を達すると云ふのではないが、稍やその一の目的が所謂始めの缺乏が満されるや否や第二の缺乏が起つて來る。剛を得て蜀を望むとは能く云ふた言葉で、吾輩の教育に於ける欲望と云ふものは次第に增長——發達して來つて、昔日の考へは次第に發達して今日迄進んで來たのであるが、抑も専門學校創立の當時日本の學問の状態を見れば、英學も獨學も佛學も亞米利加の學問も遣ると云ふのであつたが、歸する所は新智識を外國の學問より日本に入れやうと云ふのであつた。これが徐々と進んで來て日本人も外國の新規の學問を學

んで智識も漸々進んで来るが爰に於て憂ふ可き現象と云ふは學問の上、に英吉利派、獨逸派、佛蘭西派、亞米利加派と云ふやうに學派と云ふが起つて來た、全體此の學問の心理には國の境界があらう筈はないけれども、合併ながら政治とか法律とかに就てはその國々を最負する事になる、英語を習ふ人は英國の最負をなし、佛學を學ぶ人は佛蘭西を最負すると云ふやうな譯で互にその學派々に據つて相軋する状態を顯はして來た。

第一の希望

そこで吾輩は考へを一轉してこれはドウも國家の爲容易ならん事である、國として教育に根底がない事になり、何時も外國の學問の爲に日本が動搖せるるゝ事になる、或は英の爲に佛の爲に日本の思想界の變動を來す事になる、結局日本國民と云ふものは獨立の氣象を失なつて

仕舞ふと國民獨立の基礎を傷けられ日本國民が獨立しない事になる、爰に於て學問の獨立を企てやう、國民の思想を統一的に涵養するは國の獨立を強固にする第一策である、と信じ、余は其の當時政府の反對に立て居つて社會を觀察して見ると外國の學問に依つて國の思想を支配される時は、皆な當時政府の勢力に服従すると云ふ事になり、政府の勢力者の意思に依つて導て行く、若し政府が間違た意志を以て命令して此の獨立の思想のない國民を導て行けば、國民全體が悉く此の間違た方針で子弟を誤つて仕舞ふ事になる、故に學問は必ず獨立して確固として動かさない學問、即ち日本には日本の學問がなければならぬ、日本は日本語を以て日本の文學を以て如何なる學理をも理解しなければならぬ、國の語が一番大切である、日本が三千年來の國の文學、日本の國文を以て政治も法律も哲學も化學も書く事の出來ない道理はない、日本の發達を勤めるには如何なる高尚の事も日本の言葉で云ひ顯はす

事が出来、如何なる學理をも日本の文學で研究する事が出来なければ到底國は發達せぬ譯であるから、吾輩は甚だ大膽の譯であつたが、斯う云ふ目的を以て専門學校を起し爾來二十年間此の目的で進んで來たが、今日は稍や見る可きものとなり、有益なる書籍も此の出版部より陸續出版される様になつた。

第一の希望

サウ云ふ譯で今日まで進んで來て見ると更に又第二の希望が起つて來る、逆も此の一の専門學校のみで幾許唱導した所が、其の勢力は微弱のものであるから、此の主義を段々擴張してドウか外にも斯う云ふ主義の學校の起らん事を望むのである、是からは私立學校で此の聲を多きくして帝國大學をしてサウ云ふ方法を取らする事が必要である、此の學校から出た學生が教育の方面實業の方面其他社會の上に宜い結

果を顯はして、ソシテ是が爲に帝國大學が刺撃を受けて善くなり共に共に切磋琢磨の効で漸々宜くなつて來る私立大學と官立大學との競争は尤も双方相互に相勵む所で大なる利益を生ずるのである、早稻田も専門學校ばかりでなく、大學校、中學校、實業學校に於て益々有爲の材を出して他の官立學校を刺撃して行くと云ふ希望を以て居る世間或は吾輩を以て大言壯語を放つて喜ぶものゝ如く評する人もあるが、吾輩は人の批評には構はぬ、吾輩の思想は常にサウ云ふ方面に向つて働いて居る決して殊更に大言を放つて自から快を取ると云ふ譯でない、眞實自から信ずる所を語るものであつて、早稻田専門學校開校以來と雖も矢張り其の主義で進んで居るのである、又事實に於て此の學校の勢力が教育社會に認められたので、最初専門學校を設置した時は當局者は何でも此の學校を敵と見て種々の妨害を與へて苦めたものであつた併し最初八十名あつた生徒が漸々に多くなつて今日は三千人に達し

教員の數も八十人以上に達した。斯の如く吾輩の思想は二十年間屢々として進み其の思想が社會に出現されたのである。

模範的學校

この早稻田中學校は設立して僅か五六年経つたものだが此の學校がドウ云ふ地位を占めたか過日文科大臣にも遭つたが同大臣曰く恐らく官立公立の中學校で早稻田中學校の右に出るものはない中學校中の模範となる可きものである。斯う云ふ言を云つたが大方視學官等が見て行つて一番宜しいと報告したものであらう。文部省の直接監督する學校よりも宜い官設學校はドウも宜い教員を得るに困難である。學校の教員はドウしても生徒と親密でなければならぬものだがこれが官公立學校では親密に行かぬ。此の生徒と學校の關係は頗る親密で行

く事は私立學校に求む可きであるが尤も一般の私立學校で利己的金儲けなどしやうと云ふ學校これはマア別であるが早稻田學校の如き私立學校の起る事は文部省では最も喜ぶ所である。早く附屬の小學校を設立し全國の模範小學校にしてお貰ひ申たいと云はるゝが今度成立つ所の大學は官立の帝國大學よりも良い結果を見て官立大學よりも私立大學の方が遙かに宜しいと云ふ時期が來たらん事を熱心に希望して居る吾輩の慾望は次第に發達して來て止まる所がない。此の早稻田大學が帝國大學より立派な成績を表はすと同時に此の大學から人傑を生み出すと云ふ事が必要である。一國と云ふものは大抵サウ多數の人間ではない。一人か二人の大豪傑が必要であります。此の一人か二人の豪傑が出來ればその感化力は國民の先覺者指導者となるのである。ドウか大いなる教育家大いなる學者が起つて此の思想界に大變動を起すやうありたい大いなる文學者哲學者が現はれて一國の文

學の上にも政治の上にも驚くべき變化を惹起して國民全體をして學問獎勵の氣象を起し勃然として國の隆盛に赴くやうありたい。これは則ち豪傑の士一人若くは數人の力である。今日沈滞して居る社會の狀態はドウであるか。宗教界も實業界も一般日本の現象に於ては痛歎に堪へん事が多い。一般の人士は國家全體の利害を慮らずして、皆己の財布を肥す事に熱中して居る輩が跋扈して居る故に文學も宗教も悉く腐敗して仕舞つた。此の難局を救ひ一變せしむる力は、恐らく帝國大學から出る人士にあらずして吾早稻田大學から出る人傑を俟つ可しであらう。今日も社會に於て最も活動して居る良い人間は自由教育の許に於て現はるゝので、彼の形式的に矢鱈に學科を備へて先生たちの講義を聞かせ、其の講義を最も能く記憶したものが試験に立派な及第をなし、文官の試験に於ても矢張り此の先生の講義を旨く記憶して答へたものが官吏に及等するのである。斯う云ふ様な事では逆も人傑の

養成は覺束ない人傑を養成するには天然の才力、天然の智力の自由に發達するやうにあらねばならぬ。文學者も理學者も其の他種々の學を究むるのに獨立不羈の學者を出さねばならぬ。其の學者が社會に立て其の學問を社會の上に應用すると云ふ常識に富んだ所の人間を養成しなればならぬ。斯う云ふ人物が續々現はれて來ると其の勢力が自ら帝國大學、其の他の學校に影響して來るから、爰に於て他の諸學校の積弊を矯正する事が出来る。これが今日の私の欲望である。以上は吾輩の教育上に於ける思想の四十年來働いた所の簡單なる歴史の一部分であるが、尙ほ一般教育の上に於ての考へは必要と認むる時に於て其の意見を述べ、る事に吝かならんのである。



菅公千年祭始末

侯爵 黒田長成君

菅公會の因由

菅公會の始めて起つたのは去ぬる三十二年の夏であつた丁度昨年が菅公の薨去から數へ年で一千年に相當するのであるから、ドウか夫迄には太宰府にある所の菅公の社を十分に修理し夫から神苑も一層擴張して、其の上後世の紀念になる建物を設けたいと事ふ事から菅公會を起す事になつた尤も夫等の事は有形上の設備であるけれ共無形の精神上の一般に及ぼす所の感化の點から考へても菅公の如き大人物を厚く尊崇すると云ふ事は大に世道人心に裨益のある事であらうと云ふ考へから會を起す事になつた其の當時菅家には由緒ある人もあつたのですが何れも種々な故障があつて會務を引受る事が出来なかつた爲に私が菅家と云ふ方の家柄に直接の縁故はありませぬけれど菅公の墳墓地である所の太宰府の神社と云ふものは元私の祖先の舊領地に屬して居つて代々菅廟の爲には盡した事もあり加之私の家系は菅公の最も知遇を受けられた所謂水魚の交りを結ばれた所の宇多天皇から起て居る、サウ云ふ様な縁故があるので旁々敢て會長の任を受ける事になつた其の以來筑前太宰府と東京の私の邸内との二ヶ所に事務所を設けて會員の募集に力を盡した。

有力者の賛成

先づ本會の主意に就ては朝野の最も有力なる人の賛成を得る事が必要であると思つて段々同族その他の人々にも説いた所が幸に非常な賛成を得て此の話を致した時に不賛成の意を述べた人は少しもなかつた位であります。それから又外國人の中にも公使始め著名の人々に

菅公會の話をした所始めは神として祭ると云ふ事であると云ふので、懸念を抱いて賛成を躊躇して居つた人もありましたけれども、能く菅公會の主意も話し其の事柄が獨り日本に限つて居る事ではなく、道徳上の感化の一般に及ぼすと云ふとは最も主とする所であると云ふ話をした所が能く其の趣意を了解して大多数の人も賛同を表し名譽會員になつた人も澤山あります。

菅公會と豊國會

此の菅公會と云ふ名稱を設けたのは始め會の起りました當時先づ一番主導者であつたのは私の他には菅公に縁故のある家柄で菅家の人々夫から維新前太宰府の方に國事の爲に赴かれて居つた人々が一堂に集會して話合つた其の時に菅公會と云ふ名にしやうと云ふ事て決したのである、それから社殿の修理、梅苑の擴張、文書館の建設、一千年

祭の經費維持費と云ふやうな事を大體極めました、實は私は既に御承知の豊國會の事に就て、先年微力を竭した事もある、豊公は所謂武の神として我國に於て最も尊信せらるゝ人でありますが、今度は不思議にも又文の神として日本唯一の人とも云はれる菅公の爲に力を竭す事になつた畢竟これは一般の世道人心に益する事が多いと云ふ精神から竭す考へになつたのである、それで私は元來お祭り騒ぎみたやうなことは甚だ好まないものであるが、豊國會と菅公會とは今も云ふ通りの次第で決してお祭り騒ぎではないから、他の勧めに應じ敢て其局に當つて一臂の力を奮つた譯で、豊國會以前にも今度の菅公祭以後にも種々な微細なる事柄には係り合つたことなく又係り合はぬ考へてあります、豊國會の事業の完結いたしましたのも一は豊公の御威徳が然らしめたる所であり、また一は當時二十七八年の戦勝以後の日本の社會一般の狀況が熾んであつたと云ふ事も、豊國會の目的を達

した一大原因だらうと考へて居る然るに先般菅公會を起して其の以來我國社會の狀態は御承知の通り政界の模様と云ひ又經濟界の不振が甚だしき事であつて殊に年限も僅々たる歲月であつたのでありますから前途何れも氣遣つて居つたが幸に好結果であつたのは畢竟これは所謂菅公の聖徳の致す所と思ふ。

教育會の賛成

菅公に對する日本人の記憶と云ふものは實に日本全國到る處に大小の社を設けて祭つて居る夫に依つても分るが精しく菅公の聖徳を述べないでも苟くも日本人たるものは菅公を有徳の君子である誠忠の士であると云ふ事は知らざるものはない畢竟それが爲に賛成者も續々出來たやうな譯である殊に此の事は教育上には最も適切なる關係がある所謂抽象的に仁義道德と云ふ事を説くのも必要であるが之れと

同時に又一方に於ては適切なる立派な例を述べてそれに依て人を感化せしめると云ふ即ち菅公の如き聖徳の人を標準としてこれを百世に師として萬世に教へを垂れた方として尊信をせしめると云ふ事も教育上最も適切な事柄であつて夫れが爲に教育社會に於ても大に此の擧を歓迎した次第で帝國教育會の如きは卒先して賛同を表し會長辻新次氏杯は現に菅公會の事務監督と云ふ一の役員となられた夫から同じ帝國教育會の主なる役員である所の肝付海軍少將の如きは本會の會計監督を擔任せらるゝ事になつた夫から筑前に於ては小野隆助と云ふ人が事務長で田中種光が事務副長となつて東京に於て事務の取扱は貴族院書記官金山尙志に庶務を擔任せしめて居りました夫で始めから會の目的は成る可く多數の賛成者を得ると云ふ事が主眼であつて日本國民たるものは成る可く多數の人が相集つて菅公の聖徳を唱し今日及び後世の人心を鼓舞したいと云ふ事でありますから。

一面には帝國教育會の手を經或は其の他の教育者の盡力を以て全國の學校の學生生徒抔に向つても勸誘を試みた所が意外にも續々賛同を表する事になり従つて寄附金等も豫期したよりは一層多く集まりまして目的の通り社殿其の他の修理も期限より早く出來文書館美術館の類も伊東忠太の設計で出來上る事になつた此の建物の如きは京阪以西等には稀に見る程の優美の建物であると云ふ事は或る美術家が賞讃した位である夫から神苑の擴張に至つても菅公は花木の中にも殊に梅花を愛せられたのである故に神苑には主として梅を植ゑてあつた併し何分規模が狭小であつたから十分これを擴張する事になつて餘程是迄の面目を改めて居る併しこれは向ふ數年を期して大規模の設計にする事にして居るが今日迄も遠近より随分老樹を寄附したのも澤山あつて今迄田畑であつた所なども多くは梅苑に變じて仕舞たのである一兩年前とは見違る程規模が大きくなつた實に先頃

の一千年祭は所謂千載の一遇とも云ふ可き祭であつて我々が此の機會に遭遇したのは誠に僥倖と思ふ。

一 千 年 大 祭

夫て昨年の三月廿五日より四月二十五日まで即ち一ヶ月間を期して大祭を執行する事になつた此の大祭の機會を利用して福岡縣の教育大會を筑前太宰府に於て三月の三十日三十一日の兩度に催ふし四月の一日菅公一千年祭の大式典を舉行しました。

私は三月の廿八日東京を發して太宰府に參つて三十一日の教育會に於て教育上の事柄より施いて菅公の御威徳を顯揚する必要を説きまして一日の式典は自から舉行した其の時に福岡の學校の生徒なども多く參拜して菅公の唱歌を唄ひなどしましたその他祭典の事に就ては種々申述る事もありますけれども夫を一々述べる必要はないと思ひ

まするから畧する事に致します。
 詰り太宰府の社は菅公の遺骨を埋めてある場所、日本全國千を以て
 數ふる程菅廟は數多くあります。が就中太宰府がその根本であると云
 ふ事は疑を容れず従つて世人の同情も最も多く此の太宰府に向つて
 注がれて居ると見える。其の證據には各地に於て行はれた大祭の如き
 も太宰府神社の大祭が最も好結果を奏しつゝあると云ふ事に就ても
 明らかであらうと思ふ。他の社で催ふして居る大祭は憚り無く申せば
 唯々一時の賑ひを致しただけの事でそれも意を用ゐぬと云ふと、教育
 上の感化の爲に菅公を祀ると云ふ趣意には正反對の結果を來す虞が
 無いとは言へぬ種々なる餘興だの其他卑猥なる催などをすると云ふ
 と菅公の千年祭を舉行した爲に却て全國の風俗を破るやうな虞が無
 いとは言へない併しさう云ふことは一般に充分注意して居つたと
 堅く信ずるのであります。けれども多くは一時の外見に屬することに

終つて仕舞ふ後に確りした紀念の物が残るとか或は屹度後世の人心
 を刺激するに足るだけの感化を與へると云ふ點に於ては、我菅公會の
 計畫は他に比して大に優る所があらうと思はれる。先度筑前に參る途
 中諸所の菅廟にも參詣を致して祭典の模様を實見しました。が僅に社
 殿を修理する位に止まつて其他は一時の賑ひだけのやうに思はれる
 それで太宰府神社の祭典の期間中は祭禮をすることは宜しいけれど
 も其爲に風俗を壞亂すると云ふやうな虞の無いやうに充分太宰府の
 役員などにも其越意を傳へてさうして舉行さしました次第であります。

菅公の誠忠

前にも申した通り菅公を千年の後に祀つて大に公の威徳を顯揚する
 必要があると云ふのは専ら風教を維持する上から其必要を感じた譯

である、それには空に道徳上の大本を説くと云ふよりは、日本の歴史中にある所の立派な人物を擧て其人の性行に倣へと云ふことを以て説く方が適切であるからして、それで菅公の威徳を大に顯揚することに致した菅公の誠忠のことは實に天地を動かし鬼神を泣かしめる程のものであつて、我邦數千年の歴史中に其比を見ないと思ふ位でありませう、菅公が宇多帝の御目鏡に依つて儒臣から一躍して大臣大將に昇らせられ當時の政治上の弊害を救はれ様とした誠忠は申すまでもないこととあります、が、太宰府に左遷せられた後に身を持して居られし様子、菅公自身の著書又其他の記録に依つて見ても後世にどうしても尊崇せらるゝ人であることと云ふことが分るのである、詰り當時不軌の罪名を帯びて九州に流されたのである、名義は太宰權帥でありますけれども、其實は官から俸給手當等も受けたのではなく、全くの流人でも酷薄なる取扱を受けて自分の妻女も同行を許されず、子供も成長した

のは皆隨行は出来ない僅に幼少なる小兒を連れて従僕一人位で筑紫の太宰府に貶謫せられた、さうして太宰府に行かれてからの菅公の舉動は何うであるかと云ふと斯の如き取扱を受けても少しも帝室を恨み奉るやうな舉動は見えないのである、門外に散歩にも餘り出られなかつたと云ふことである、或は天拜山に上り九天に向つて自分の怨恨を訴へたと云ふやうな言傳もありませうけれども、是は全く訛傳であつて、菅公の作られた詩にも門を出ずと云ふ、——不出門と云ふ題で作られた詩の中、何爲寸步出門行と云はれて居る、それに依つても謹慎して門外に寸歩も出られなかつたと云ふことが分る、一面には風雅な人であり古蹟に富んだ太宰府地方のこととありますから、随分散歩にも出掛けられて風景を賞することがあつたかと想像も起るかと思ひます、がさう云ふことは絶へて爲かつたので、都府樓纒看瓦色、觀音寺只聽鐘聲と云はれ居る位であります、さうして雪が降つて來ても薪炭に乏し

くして、充分暖氣を取ることが出来ない、雨が降つて来れば諸方家根が破れて居つて雨漏りがする、それを防ぐことも出来ぬと云ふ程資力に乏しかつた甚しきに至つては三度々々の食事のこともさへ缺ける位であつたのである、それで太宰府に赴かれて僅かの間に段々衛生を害して生命を縮められ二年足らずの内に薨去せられた位である、斯の如き悲惨なる境遇に陥られたにも拘はらず有名なる彼の「恩賜御衣」の詩にもある通り始終帝室のことを念頭に忘れずして、少しも恨み奉る所がない之に依つて見ても菅公の氣性は堅忍不拔で誠忠であつたと云ふことは明かであらうと思ふ。

菅公の徳操

此處にもありまする通り種々菅公の事に付いては、近來著書が多く出て非常に菅公を賞揚する人もあり、又菅公を大變に悪く非難する人も

ある、自分の考では両方が極端に陥つて居るやうに思はれる、菅公と雖も今日神に祀られて後は實に圓滿聖徳であるけれども、生前に於ては吾々と同じく人類であるからして長所もあれば短所もあらうと思ふ、それで生前の菅公を圓滿無缺の人のやうに言ふのは誤りであると思ふ、又菅公は皇室に對して不忠なる考への人であると思ふ、また菅公の中にも大變極端なる説であらうと考へる、然るに往々今日の學者の中には菅公に實際陰謀の企のあつたやうに言つて批難する人があるが是などは大なる誤りである、其事は笑ふべきことだと思ふ、當時菅公を陥れた人はそれ程までに愚人ではなかつたらうと思ふ、信ずる何故かなれば菅公に實際陰謀は無かつたのであるけれども、菅公が居つては彼等が政權を擅にすることが出来ないから、何か難癖を付けて菅公を排斥しやうと云ふ所からさう云ふ讒言をした、決して菅公に陰謀があつたとは思つて居なかつたのである、併し今日批難する人は眞實菅公に

陰謀があつたと云ふことを思ひ違へて菅公を批難して居る是等は當時菅公を陥れた人よりも低い考と言はなければならぬそれから他の極端に菅公を非常に賞め立てる方の説では單り道徳上のみならず武術家としても亦能書家としても或は文學者としても歌人としても詩人としても甚しきに至つては大政治家として即ち菅公を總ての點から神の如く尊崇を致して居る説がある是亦餘り菅公を賞過ぎた説で却て菅公の爲には最負の引倒しになる説だらうと思はれる成程菅公は幼少の時から詩歌を能くし文章も上手で佛學などにも壯年の時から精通して居られたには相違なく弓の如きは大變達人であつたと云ふ言傳へがある其他彫刻も上手であり書も日本三筆の一と言はれた位で成程菅公は其通り多能多藝の人であるけれども所謂一藝一能に付いて云へば菅公以上の人は決して少なくないことと思ふ蓋し菅公が今日の如く一般の同情を惹かるゝ所以は夫等の多能多藝の上にある

のではなくして先刻申した菅公の誠忠とか徳操とか云ふものが大に後世の人心を刺激して同情を惹起したのであらうと思ふ菅公の一世が圓滿に終つたならば或は今日の如き同情を世人が表さなかつたかも知れぬと考へる所謂家が亂れて孝子が分り國が亂れて忠臣が出る

と云ふ諺のやうに菅公が斯の如き逆境に陥つたので初めて菅公の誠忠なる精神が世上に紹介されたそれによって一般に能く其精神が徹底したから同情を得られたのであらうと思ふ今菅公を賞過ぎる説に依ると非常な大政治家のやうに言ふ人がありますけれども政治家として虚心平氣に日本の歴史を繕いて見たならば菅公以上の人は指を屈するに違はないだらうと思ふ其他學藝上の點から言つても菅公に劣らぬ人は其頃に於ても空海なり最澄なり其前後にもナカ／＼菅公に負けない人がある決して菅公の長所は夫等の點ではなくして誠忠徳操が後世仰がれて標準になつたのであらうと私は深く信じて居る殊に當

時の政界の有様は藤原氏が鎌足以來朝野に根底を固めて居つて、先きに吉備大臣も藤原百川と争ふて遂に排斥せられた位である、其以來藤原の権力が一層盛んになつて菅公の頃は最も其旺盛を極めて居つた時分である、それであるから一に菅公は獨力を以て其政弊を救ふと云ふことは到底爲し得られぬことである、之を強いて斷行しやうとしたならば單り事が行はれないのみならず、皇室にまでも累を及ぼす虞がある、加るに菅公は一面に於ては堅忍不拔の人でありますけれども、又一面に於ては詩人として多情多恨の神経質の人であつたと云ふことは疑を容れない、菅公の詩中にも現はれて居る要するに温厚の君子で決して撥亂反正の大手腕ある英雄のやうな資格を有つて居るやうな人ではない、それであるから、當時の政況に鑑みて種々な暴斷をするやうな事は敢てしない人である、菅公は藤原の一族を根柢から覆へして政權を奪はふと云ふ様な考へては決してない、唯々其の弊を救つて皇

室の御爲を計らふと云ふ考へだけであつたらうと思ふ、けれ共ア、云ふ時世であるから其終りを全ふする事が出来なくつて、遂に大宰府に貶謫せらるゝ事になつた、これは菅公の爲に誠に傷ましきとであるが併し公の歴史は此一事に依つて無上の光彩を添へたのである、現に公の詩を見ても左遷以前の詩は順境の詩であるからして、味ひが薄いのてありますけれども、左遷以後の所謂菅家後集に載せてある詩は菅公が逆境に陥つて作つた詩であるから、悲壯雄勁で大いに人を感動せしむる傑作が多いと思ふ、後世に至つて深く公を仰慕尊信するもの左遷後の公の言行が専ら之が基を爲すことである、斯の如き有様で左遷以後菅公の生前の苦みは却つて死後の光榮と化したと云つて宜しからうと思ふ、偕段々話せば竭きないことでありすが、詰り菅公を誠忠であり徳操堅固の士として百世に師表たる人物として我々が仰いで尊崇すると云ふ事は教育上最も裨益の多い事と考へる故に菅公會を起

して都合よく大祭典の式を舉行しましたのであります。

(完)

四十

美術談

美術の歴史

樞密顧問官從二位勳一等男爵

九鬼隆一君

美術の話はせよと云ふのだが、美術の話なれば極く好きの途だからして僕は幾許でも話をしやうが、併し美術の何の部分から話をしたら宜いかと云ふとを考へて居るが、先づ歴史の部分から話をして、夫から他に及んで往かうかと云ふ考へだ、一休此の日本人は金を拵へるやうなどが餘程下手だ大業偉圖をなすとか、非常に根氣の強い健忍耐久な宏業大計をなすやうなとは不得意の方である、夫と引かへて日本人の美性は高尚とか清潔とか或は義侠にあるとか慈仁にあるとか又優美であるとか温雅であるとか、又勇氣にゐるとか清雅であるとか或

は淡清にあるとか恬淡淡泊にあるとか云ふやうなとは日本人の特性であつて自然美術などは日本人の得意の中の一で、ドウも此の美術のとは他の經濟だの法律だのと云ふやうなものとは違つて、土地柄若くは其の人種に依ては殆んど其の性質にない程の所もあるやうだ、先づ支那で云うても唐朝或は宋朝明朝などは餘程美術が盛んである、文明の事は總て盛んであるが、元朝及び今の清朝の如きは殆んど美術は絶無である、即ち元朝などに美術が幾許かあると云ふのは大抵宋朝の殘物だ、此元朝の人種清朝の人種といふものは、即ち蒙古韃靼滿州の方の人種であるが、ドウも此の朔北には美術は殆んどないものだらうかもしれぬ、夫て所謂支那人と云ふ方は大に美術思想がある方で、美術思想は主として揚子江の方に近い側に餘計持て居る、朔北の方にはドウもマア少ない土地から云うてもサウ云ふ状態である、人種ではドウも支那人には十分文明美術の思想があつて、滿州人にはドウも少ない、夫から

歐羅巴で云うても美術の高尙と優美で清雅であるのは、ドウも羅甸人種の方が餘程優美の特性を持って居るやうだ、勿論此の十九世紀の世界の大勢は、却つて索遜人種などが非常に盛んの事であつて、兎に角法律政治經濟武備總て國政は下の方の人が餘程盛んに遣つて居る、其所で國家が盛んになるに伴れて、百事その文明も大變其の方に向つて居るが、其の百事盛んに國家の勢が非常に強大である所の區域に立入て、餘り美術の特性が深く高くはないと云ふ批評をするのであるからして、世の中には決して入れられない説であるけれど、極く公平に云ふたならば、美術はドウも希臘とか或は伊太利とか或は西班牙葡萄牙とか或は佛蘭西とか云ふ方がドウも其の美術は盛んであるやうにある。

風土と美術

夫は強ち人種では云はれない、云はれないが丁度日本の此の美術には

富んで居ると云ふが如く、希臘の地勢、夫から伊太利の地勢と云ふものは餘程日本に似た所がある、海に出張つて居つて、夫に所々無量に屈曲があつて、景色眺望に變化があつて、氣候が穩かて、水の色、空氣の色も麗しくて、鳥獸花卉も美しく、地理から云うても、ドーも其等の地方には美術が成長し易いやうだ、寧ろ人種の論よりか地理の論の方が緣故が餘程深いやうに思はれる、餘程今云ふ所の如きは日本に似て居る、其所で日本の此の文明美術に養はれたと云ふとは自然に幸の國であつて、氣候もよくて、景色眺望は變化があつて、優美で高尙で知らずこゝに美術に養はれて居るやうな形勢である、夫に第一は日本の人民と云ふものは非常に此の孝順で忠節で辱くも萬世一系の歴代の聖主を戴いて、其の恩澤の下に沐浴して居るからして、戦争など、云うても大陸地方の亂世には及ぶ可きもないもので、日本で幾許大きな戦争をしたか、らと云うても、歐羅巴だの支那地方に比して見ると、僅かな小兒が石の

投合するやうな小さな戦争だ、ナカ／＼歐羅巴だの支那の大戦争と云ふのになると非常のとである。

革命と美術

夫てウイリアソンの書物などを見ると、支那の或る革命の際には、前朝の人民は流離顛沛して殆んど其の半分は滅亡して仕舞ふやうなことがあると斯う書てある。或は或る革命の時には、全朝の人民は三分一滅亡して仕舞ふと云ふとを聞いて居る。夫は如何にも事實であるやうである。併し以前のととは統計が明瞭でないからして細くは分らないのだが、支那の如きは非常な大國で、御承知の通り今日清朝が僅かに二百年程盛んに續いた所で、人民は四億萬人以上になつて居る譯だけ共、ドウもこれ迄大亂のあつた後では、明瞭には分らないが一億萬位も無いやうにある。夫は革命の際には非常な苛いところが行はれるから、サウして大

抵は人種の喰合であつて前朝の文物は悉く破壊して仕舞ふ。夫が爲に切角文明になつて居つた所も、其の文明が接續しない爲に、一時全然潰滅して仕舞ふやうな状態になる。現に唐朝の如きは、實に文質彬彬、唐朝の文明と云ふものは非常の點度まで達して居る。詩歌文章と云うても例の李杜韓白の四人の如きは、種々な議論はあつて或は孟子の文章の方が上であるとか種々の論はあるけれど、共眞實詩文の上から云ふたらば李白杜子美韓退之白樂天の四人の如きは、殆んど此の亞細亞地方の空前絶後の大詩文家と云うても宜い位である。夫と同じく此の美術繪畫の如きも、吳導子抔と云ふ人は先づ支那に於ては空前絶後の書人と云うても宜いかも知れない。總て此の唐朝の文明と云ふものは、非常な點度まで達して居つたものだ。夫にも係はらず、残念の事には一度革命の亂に際して後朝の勢力をなしたときは、大抵以前の文明を全然打潰して仕舞ふ。夫は一寸と唯だ日本の比較の爲に一部分を云ふたのである。

るが日本はサウ云ふ大亂と云ふものは曾てありはしない。夫て第一萬世一系の有難さの爲に一例を擧げて見ても、帝室の尊嚴に向つて毫末も指を差すものがない證據には、美術道に於ても世界絶無のものが残つて居る。即ち奈良の正倉院の御倉の如きものは世界中何所を探しても彼のやうなものはない。例の三好松永の如き日本に於ては随分亂暴な戦争をして居るが、殊に奈良地方の如きは非常に蹂躪せられた土地であるけれども、帝室の尊嚴の爲に、敕封があるために、三好松永の如き亂暴者でも正倉院の御藏には毫末も指を添へなかつた。夫だからして千二百年前の天平時代の帝室の御寶物と云ふものは悉く残つて居る。サウして聖武帝の御草鞋から御杖までも確乎と現存して居る。僕などは歐羅巴でも美術館とか博物館と云ふものは頗る好きの途であるから、見て回つたものであるが、何所に行つた所で我が帝國の奈良の正倉院の御藏の如き千二百年前の帝室の御生活の状態までも悉く寶物に

依つて見るとが出来ると云ふやうな國は一ヶ國もない。世界地球上にあんな所は一もない。伊太利のポンペーの如き所は如何にも珍らしいものである。二千年前の都府が餘程の程度迄見られるからして、實に珍らしい所だけ共、これは矢張り火山の灰に埋られて居つたものを漸く掘出したものであるから、今いふ如く天皇の御杖であるとか、草鞋であるとか云ふものが残る可くもないとて、只不燃質のものが残つて居るだけである。

日本文明の持續

また日本の文明と云ふものは丁度ウエトツブ……渡のやうに高くなつたり低くなつたりして居る。共日本の文明と云ふものはズツと文明の基礎が起つて來て、始終連續して今日に至る迄間斷なく進んで居るのだから、夫て奇態に日本帝國は都合よく文明が進むのだ。夫て此

の小國でありながら其の文明の程度と云ふものがナカ／＼な勢力を占めつゝあるので先づ今日では其の軍事であれ經濟であれ法律制度上であれ總て非常の強大な勢力を有て居る所の歐米各國に比較をして日本の方が高いと云ふとは云へないけれ共美術上の特性を以て居るとに就ては決して恥ぢないので、且彼の大勢力に向つて日來が勝つて居るとか云ふとを發言をした人は、殆んど社會から罪人の如くに云ひなされた人もあるけれ共、僕はその邊の事に關係しない、其の邊の事は僕は云ふ必要もないのである、唯だ日本帝國と云ふものは如何にも文明の進歩上に都合のよい幸ひなる國柄であつて如何にも結構な特性を持つて居るものだ、夫だからして是から先何程でも進みたいだけは進める、是迄にも幸にして大陸地方の如き大革命大亂と云ふ事に陥らないうち陰で文明が接續して波の如く高低はあるけれ共、萬國の長所に同化しつゝ漸次大に進んで居るのである。

推古以後の美術

夫て先づ其の波の如き高低が出来て居る時の極く概略を云ふと、先づ推古の朝以前はこれは考古の學問に歸して於て推古の朝以來が美術と云うて論ずるとの出来易い時代であるからして、推古の朝が一のトツプになつて居る、夫から天平、この天平は非常に熾んものだ、夫から次が弘仁、即ち桓武帝其の下には弘法大師がある、夫から延喜の朝、此の時には菅公がある、畫家には巨勢の金岡がある、これが盛んの時である、夫から引續て藤原の時代に頗る優美で、ナカ／＼美術は盛んのとてあつて、夫から鎌倉になつて大分其の美術が一變したのだ、此の時代には餘程武張て來て強勁でナカ／＼盛んのとて、夫から鎌倉の末になつて北條が政事を執る時になつては、彼れは自然の勢からして質素儉約ならざるを得なかつた、北條と云ふものは、陪臣が國命を執つたものであ

つて餘程自ら謙遜し卑下して居つたものと見えて、北條の政事と云ふものは頗る民政に注意したものである。所謂非常な勤儉尙武を遣つて勤儉と云うても苛い勤儉で自ら謙遜して民政の整頓した事に至つてはナカ／＼豪いものだ。サウ云ふ状態であつて一方には又蒙古の襲來などもあつて、勤儉尙武は誠に止むを得ない事でもあつたらう。北條が陪臣で國政を執り随分殘忍のをしたに係はらず、彼が九代の覇權を握つたと云ふとは、先づ此の非常に自ら謙遜して所謂勤儉を十分に遣つたからで、夫て彼の家が續いたものであらう。サウして彼れが其の一方に向つて文明……美術道工藝道の進歩は非常に遅れた非常に沈淪して居る夫て一寸と枝葉になるけれ共此の勤儉尙武の政事と云ふものは、所謂衰勢に於て餘儀なき時には止むを得ないものであるけれ共、これは大に殖産工業を起さう、文明を進めやうと云ふ國家將來の爲にはナカ／＼困るとだ、彼の朝鮮と云ふ國が以前の文明はナカ／＼豪いも

ので日本などに來て居る美術工藝品杯でも朝鮮出來のものが澤山ある、澤山あつてナカ／＼結構のものがあつて、夫にも係はらず今日の朝鮮出來の品と云ふものが全く最下等劣等國でもある様に何程のものも出來ない、サウして貧乏で微力で文明どころか何も出來はしない、サウして人間は殘忍で不人情で殆んどマー仕やうのない状態になつて居る、夫れは種々の原因もあるであらうけれども、第一が彼の豊太閤の役で朝鮮なるものが非常に苛められた、夫から引續て非常な勤儉尙武の政事をやつた、尙武と云ふとよりは寧ろ極端な勤儉の仕事を遣つたらしい、一體此の勤儉と云ふとも勤の字は實に結構のものであるが、勤める勉強すると云ふとは所謂生産的のとて結構のとであるが、儉の儉の字と云ふものは餘程用ひ場の六つかしいものであつて、儉約の儉の字を餘り用ひ過ると國家の爲には非常に困るとが起つて來る、夫て朝鮮は何ぞ必ずしも豊太閤の役で苛められたばかりでなく、彼の地勢が

難儀の國で、一體國家たるものは小さな敵國外患はある方が宜いものだけれども、朝鮮の如きは敵國外患に向つて堪兼る國であるからして、是等種々の原因であらうが非常に極端な儉約政治を遣り過ぎたものであるからして所謂殖産興業の發達す可き萌芽を悉く摘きつて仕舞た、夫て今日では美術工藝と云ふものは殆んど絶無だ昔の美術工藝の隆盛であつた時の面影は、其の遺物が日本に渡つたからして誠に昭々乎として明らかに残つて居るに係らず今日では殆んど美術工藝と云ふものは絶無であつて彼の通り衰微の状態である、國力奮はず道徳地を攘つてなし、文明美術など、と云ふものは何所に風が吹て居るか、と云ふ状態である、夫て今云ふ所の日本帝國に於ても、北條の政事と云ふものは、朝鮮の今日の如き勢をなすだけの極點には至らなかつた、れ共、北條氏は儉ばかり用ひ過た譯てはないが勤儉尙武と云ふを一概にやつたから、美術工藝道の如きは北條では一向擧らなかつた。

足利及豊臣の美術

然るに其の後を繼いだ所の足利の政事と云ふものが、これはナカ／＼失態も多いのである、サウして天下は始終亂れ勝ちて誠に北條の勤儉尙武の反對を行つたものだからして、中には贅澤のとも遣り又一方には種々様々の文明道はやつたけれ共、北條の勤儉尙武の如何にも反對を遣つて、足利の社稷を有つたためには甚だ虚弱のものであつたけれ共、北條と同様な勤儉尙武の政治が足利で行はれて、彼の通りのものが繼續したなれば、日本の美術工藝道と云ふものは餘程衰頽するであつたらうと思はれる所が、足利はサウでなくつて餘程勤儉尙武の反對を遣つたからして、随分足利の始終亂れて居り且つ實際足利なるもの、源家の嫡流で門閥であるに係はらず、随分薄弱のものであつた誠に脆い風のものであつた、けれ共、美術工藝道は足利ではナカ／＼擧つて居る

夫からして豊太閤……此の人は非常な熾んな人で、如何にも大袈裟の人で、日本帝國には誠に珍らしい大人物である、如何にも豪壯な人で、従つてナカ／＼華麗で派手やかなナカ／＼壯麗である、第一に桃山の建造聚樂臺の建設、其の他醍醐の修理種々様々のを遣つた人だ、其所で少しく枝葉になるけれども、豊太閤の効績と云ふものは當然に朝廷に忠勤を抽んでたり、當然に撥亂反正の功を遂げられ、威武を海外に擧げられたと云ふとの他に、日本人の短所を引抜いて非常に大きくなして居る、兎角先刻も云ふ通り日本人の長所は數々あるけれど、其短所を云ふと日本人は宏大にない、大くない、夫から健忍不拔でない、ドウも淡泊で清潔で、其の淡泊恬淡の裏は動もすれば小さい、淺さい、従つて美術、其の他も小さく出来る所が、豊太閤は地球を吞吐するの大氣宇を以て、非常な剛氣な、非常な宏大な英氣を發達せられた、彼れが爲に日本人は餘程引立てられて、餘程日本人の短所を補ひ、冥々中の大効績がある方だ。

従つて美術なども豊太閤の爲には大きくせられた、夫れからして徳川に至つては如何にも整つたもので、整頓したもので、先づ一寸と完全無缺と云ふ様な風である、一寸と支那と比較して見ると、明朝のやうなものだ。

徳川の美術

夫て徳川の治世と云ふものは、美術でも法令でも工藝でも誠に整頓したものである、これを例て見ると、誠に此の美術上のは、圖にも書きにくければ、言葉に云ふとは至つて云い、悪いとてあるが、先づ書描と例へて見れば、少しは分るだらうと思ふ、其の書描と云ふものは、徳川を代表する書描が、狩野探幽である、夫れからして、豊太閤を代表する書描が、狩野永徳である、其所で探幽は十分長壽を有つた人であるけれど、其永徳は天死をした人であるし、夫れからして現物を比較して見ると、探幽は

ど出来て居らない人のやうに見るけれ共探幽は殆んど此の繪畫道を纏めて大成した人であつて殆んど完全無缺であると言ふたやうな風で夫て細大漏らすなく遣つた人である如何にも整つて居つて書をかくとが上手であつた併ながら嫌味がある餘り上手過ぎて嫌味がある永徳は今云ふが如く天死もしたから十二分に彼の人の技倆を發達するとは出来なかつたけれども十二分に探幽程には整頓しなかつたやうに見えるけれども美術上の素質と云ふものは非常な豪いものだ、ナカ／＼大手腕である、ナカ／＼高尚なものである、ナカ／＼豪放なものである、ナカ／＼鐵宕不羈なもので、夫て優大なもので、其所でこれを政治上と比較したならば政治上に於ける家康の周到明備にして細大漏らすなきものには、豊臣の政治の仕方といふものは適はない様であらう、丁度夫が探幽と永徳との比較のやうなものであつて、永徳は或は探幽より高いであらう、或は探幽より大いであらう、或は探幽より純粹で

あらう探幽のやうに嫌味がないだらう探幽のは整ひきつて居つて嫌味がある夫て美術道の根本に溯つて云ふと此の豊太閤の時をして彼の氣配をして三百年も續かしめたならば、家康の彼の氣合をして三百年續かしめたよりは、モット大くモット豪くなつたであらう。

奈良の大美術

其所で美術は時勢を代表すると云ふとを云はなければならん、夫て先刻から云ふ通り推古の朝では誠に純粹な高雅な誠に奇妙奇態な美術が見はれて居る、夫て森嚴な美術が這入て居る、夫から天平に至つては實に優美で高尚で夫から實に氣宇宏大なものである、即ち天平の美術と云ふと第一奈良の大佛即ち彼のヒルシヤナ佛……夫は聖武帝光明皇后兩陛下が大千世界をも支配する程の氣宇を以て彼れを建立なされた、其の規模の宏大なると云ふばかりもないのである、夫から天平

の美術も澤山残つて居るが即ち薬師寺の薬師三尊その薬師三尊の如きは三代帝王おかりなされて彼の三尊を建立なされた實に優美で優大で高尚で壯麗で誠に結構のものである。夫は三代帝王かゝつて建立なされた彼の頃は天平の盛事打續いて國家の倉廩府庫満ち居つた時である。其の時てさへも容易に出來ないでナカ／＼金のかゝつたものと見えるが、夫て度々救命をお出しなされて其の倉廩府庫満ちて居つた金銀財寶を盡して未だ出來上らないで更に人民の貢獻を促がしなされた救命が度々出て居る終に孝謙帝の時に至つて即ち天平の未であるが弓削道鏡の佛徳に依つて上野國に金山を發見して其の力に依つて遂に彼の薬師三尊が出來上つたと云ふとである。弓削道鏡は非常な英才であつて國家に對する勳績は夫ばかりのとはないけれども、其の弓削道鏡が非常に御信用を得て遂に帝室の御尊崇なされるやうな地位になつた。一番の勢力と云ふのは薬師寺三尊を成功したのが

一番の手柄になつて居る。夫から終に非常の失態、非常な不埒のとも顯はれて遂に下野の野に放たれた譯であるけれども、夫程のとであつて彼の時分には云はゞ鎮臺もいらぬ、知事も郡長もいらぬ、悉く佛敎を以て天下を治めると云ふ趣向である。夫は多くは即ち佛敎なる形を顯表して夫から佛法を布敎すると云ふ趣向である。夫て此の美術と云ふ有形の美術が非常に精神上の援けになつたのだ。夫て天平の美術と云ふものは如何にも高尚な如何にも優美な所まで届いて居るものである。夫から次に先刻も云ふた弘仁時代即ち桓武帝下には弘法大師、夫から嵯峨帝其の頃は即ち弘法大師が壯麗雄大な宗敎を持て來られてサウして其の宗敎を布かれ、且弘法大師が非常な英才大徳即ち日本の三聖人の一人と云はれて、弘法大師を三聖の一人と云ふとに就ては誰も異論を云ふとがないと云ふ位の大徳で、先刻も云ふ所の日本人の短所を補いたいと云ふ心持があつたのでありませうが、優美な壯麗な雄

大なる勇壯な宏大無邊な且嚴重な艱難な眞言宗を布かれた夫に丁度聯
 續して表はれて居る所の美術と云ふものは壯嚴で雄大で剛勁で且壯
 麗極まるものです。夫から藤原時代になつては、大分變じて來て優美で
 溫雅で高尚で夫で柔順なもので藤原の時代はナカ／＼美術の高尚な
 所は劣らずに來た殊に其の間に當つて佛者では惠心僧都が出現した
 即ち日本人の性質として難澁な艱難な雄大な壯嚴な宗教を稍や厭ふ
 所を惠心僧都が觀破して、惠心僧都は非常に優美な高尚な溫雅な慈仁
 な宗教を發展せられて其の思想を形て大に援けたのが春日基光です
 春日基光の技術は惠心僧都の思想を顯すが爲に餘程伸びたであらう
 と思はれる。又惠心僧都の思想は春日基光の技術に爲に非常に力を得
 たらうと思ふ。夫から下つて鎌倉です。其の鎌倉が丁度又其の時代を代
 表して居るものであつて、鎌倉は所謂尚武の時勢で、非常に剛勁で健勁
 で大層武張つたものである。又一方の宗旨は弘法大師が一轉して惠心

僧都となり惠心僧都が一轉して遂に鎌倉の宗旨は、俗に云ふ淡泊恬淡
 なものが起つて來た。第一念佛宗であるとか、禪宗が支那から來てズツ
 ト擴がつたのも鎌倉である。其の他一向宗、眞宗、法華宗、だとか云ふやう
 なものが續々起つた。夫は其淡泊眞率な宗教風は大に日本人の氣風に
 適ふたものでありませう。夫と同時に即美術は大に變化して居つて極
 く強いものが顯はれて來て居る。大變武張つた美術が顯はれて居る。尤
 も鎌倉でも初めの程はナカ／＼美術は盛んであつて、サウして彼の實
 朝と云ふ人がモット長命をしたならば宜かつたらう。實朝の歌に依つ
 て見ると、これは誠に文明の歩を進める人であつたらうと思はれる。實
 朝が長命をして居つたならば、鎌倉の美術もモット盛んになつたらう
 と思はれる。鎌倉の美術で最も名高きものは、運慶であるとか、或は信實
 であるとか、光長であるとか、或は慶恩であるとか云ふやうな人は、最も
 名高いものである。夫から一方に武張つた所であるからして、妙珍などい

ふものが起つて来て居る。又刀劔の正宗など云ふものが起つて来て鎌倉は鎌倉風の時勢を代表して其初期には美術もナカ／＼盛んの事だ。夫から下つた北條は殆んど美術と云ふものは擧らなかつた。夫から東山に至つては例の禪宗と云ふものが餘程行はれたものであるから一方には禪宗と又一方には茶道が行はれた。夫と共に此の誠に純正な淡泊な真率な繪畫などが起つて来た。夫で東山ではナカ／＼豪い美術家が澤山出来ました。第一雪舟であるとか、如拙、周文、能阿彌、藝阿彌、相阿彌、小乗宗、丹會、我の蛇足、啓書記、狩野正信とか、土佐の光信とか、ナカ／＼熾んな第一流の美術家が出来て居る。現在足利將軍は大鉢多くは自ら書なども書き書法も遣るし歌なども多く詠む。

夫から豊太閤の時此の時は例の非常に熾んな宏大な華麗な壯嚴な美術が顯はれて居る。丁度豊太閤の氣象が大に繪畫美術などにさへも表はれて居る。夫から徳川に至つては繪畫も大に各種の方面に發達して

擴がつて居る。種々の流派も起つて来て居る。又一方に此の漆器蒔繪の類などは、成程鎌倉蒔繪といふものは結構のものである。東山蒔繪と云ふものも結構のものである。然るに徳川三代より八代目迄の蒔繪漆器と云ふものは、夫は矢張り日本では極めて蒔繪の發達した時であらう。夫からボルソレイン陶磁器等の類も成程その以前にも藤四郎などと云うて、あるはあるけれども最も發達したのは徳川になつてからの事だ。

信實應擧の畫卷物

其所で時勢を代表するのに一の宜い比喩がある。其の比喩と云ふのは日本で卷物の畫の最も著名なものが幾許もあるが、其の中で鎌倉時代の信實の描いた北野の菅公縁起といふものが最も名高いものの一つである。夫から又其の一方には徳川の稍や衰へんとする時に當つて應

舉が描た七難七福の巻物といふものがある。夫は近江の三井寺にある
 此の二幅を年代で比較して見ると、丁度其の間五百年餘隔つて居る夫
 て第一流の名手なる信實朝臣の描いた畫は即ち鎌倉時代の非常に武
 張つた武士道の熾んな宗旨も非常に淡泊な眞率な武人めいた宗旨の
 行はれて居る時であるから、此の信實の昔公縁起は即ち人々相闘争す
 る殺傷する状態が書てある。夫から今を距る遠からん所の七難の巻に
 も非常に人々闘争する状態が描てある。然るに今を距る六百年以前の
 信實朝臣の描た非常に武士道の熾んな勇氣凛々たる時勢の其の巻物
 を見ると相互に殺傷する闘争する其の状態が斬るものも斬られるも
 のも誠に壯快に剛壯に死を見る事生に還るが如き状態である。夫から
 今を距る餘り遠からん所の應舉の七難の巻にある所の人々殺闘する
 状態を見ると、殺すものも殺されるものも恐ろしさうに怨めしさうに
 實に見ても戰慄する嫌らしいやうな状態の氣韻を表はして居る。

夫は即ち其の時代の氣韻を顯はして其の時代を代表して居るのだ。其
 所て時勢を代表することに就ては今日の明治の美術なるものが未だ
 餘り有難い程度に至つて居らない。未だ十分明治美術の上達ではない
 けれ共後世よりこれを見て情實を離なれ肉體に遠ざかつて公平な眼
 て見たならば矢張り今日の明治の時勢を代表して居るに違ひないの
 である。何分にも何れの時何れの世何れの所と云へども其の時其の時
 勢に當つては意外な情實を挾むものであつて、其の情實に覆はれて兎
 角其の當時に於ては公平な批評が決定し兼るものである。例へば僕の
 如きは幸にして公平な識見を抱いて公平な議論を吐いても其の當時
 に於ては社會の事物が意外な情實を挾んで居つて、ドウしても其の公
 平な議論に歸着し兼るものである。夫が世の中が皆な眼明き千人で智
 識の高いものが多數をしめて居るなれば誠に結構のものである。けれ
 共假令文明は餘程行届いて學校の數は津々浦々まで能く行はれて居

つても其の學校の教と云ふものは多くは神を傳へないものである形式を唯た傳へるものである。夫だから世間の其の當時に於て情實を抉まれて居る時は、兎角議論は公平な所に歸着しないものである。假令今日世界各國で英吉利が強大である、獨逸が非常に強い露西亞が非常に強硬である、斯う云ふ所に向つて、殆んど世界を吞吐するの勢を以て居る其の國々に向つて、何分か其の短所を我輩が指摘して見た所で、多くの人は夫を承知しない、一方に社會の必要なる戰爭の力とか或は金力財寶の力とか、法令制度の力とか或は教育の力とか云ふやうなもので世界を押し通して居るのであるからして、何分か其の短所を指摘するものゝ如きは殆んど罪人のやうに指目せられて、其の情實の爲に議論は公平な所に決定しないものである。夫が何分か時世を隔つて後世に至つて其情實と肉體を離れて其の場合から見るときには、始めて議論は公平な所に歸着する。成程彼の時は英吉利獨逸露西亞杯と云ふものが非

常に強いもので、何も彼も彼の國には敵はんと見えて居つたけれ共、矢張り斯う云ふ所は彼の國の短所であつた杯と云ふとは後世に至つて分る。

日本の美術國是

夫は一の比喩であるが、今日の日本の美術と云ふものが、ドウ云ふ所に向つて進歩して行つたならば、一番美術國是であるかと云ふとは餘程六つかしい問題である。僕などは今日例へば畫を以て比喩を取て見ると其の畫と云ふものは油を用ゐるやうが、クレオンを用ゐるやうが、インヂアンインキを用ゐるやうが、そんなとは一のメンードであるから少しも構はない、何れでも其場合に都合の能い方のメンードを以て美術の眞粹を顯はして少しも差別はないので、夫だから油繪をやつつけても、日本風の毛筆をやつつけても又クレイオン畫をやつつけても、其所は少

しも構はない唯々美術の神真といふものはドウ云ふ所に至つたならば十分高めるであらうかと云ふとを結局研究しなければならん先づ繪畫の一部分だけで云つて見ると日本の巨勢派であるとか或は土佐派であるとか或は近來の四條圓山派であるとか云ふやうな筋は全く世界各國の繪畫と同化する性質を持つて居る殊に況んや四條圓山派なぞと云ふものは唯々西洋の油を用ゐて居るのと四條圓山派はインヂヤンインキを用ゐて居ると云ふだけのとて同じ様だ唯々東洋に屹立して毅然として高く聳へて、ドウも世界の繪畫と同化しないと云ふ性質の畫は雪舟である雪舟は飽く迄これは屹然として獨立したものと思はれる雪舟の流儀は何所迄も獨立して彼の態で進んで行かなければならんものだ夫て甲乙を云うて見れば日本の畫工では曰く百濟の河成とか弘法大師とか金岡とか惠心僧都とか春日基光とか信實朝臣とか光長とか慶恩とか土佐經隆とか或は如拙周文雪舟能阿彌藝阿彌

相阿彌啓書記とか宗丹とか正信元信とか永徳とか探幽とか光琳とか光悦宗達とか應舉とか云ふやうな人は何れも第一流の畫工であるに違ひない唯だ其の種類を云ふと飽く迄同化して進めて行く流派と飽く迄獨立して進めて行く派と其の筋があらうと思はれる其所で日本の畫の一部分で云て見ると日本の畫工など云ふものは學問が誠に少い學問をしないのに誠に困まる其所で歐米の畫工のやうに學問をしないと餘程損がある併ながら其の美術と云ふものは學問で成立つ力といふものは半分までは行かない所謂學術といふもので成立つのは半分迄は行かない夫て例の寫生と云ふものは學問の部分と云ふても宜いもので寫生を以て此の繪畫の終局のものといふとは固より云はれない若も寫生が繪畫の終局のさまであるならばモ一畫なんぞのやうな面倒なものを遣らずに即ち此のサイアンスの一部分に成立て居る寫真術か何かで澤山だ併し繪畫の終局の目的は寫生も其の一

部分を爲すけれ共、非常な高い所にあるので、造化の妙用を繪畫の妙相に發揮しなければならん例へば、音樂美術と云うても直ぐに分るとで、音樂美術と云ふとに寫生が終局の目的であるなれば、世の中に顯はれて居る所の或は鶯とか松蟲であるとか、鈴蟲であるとか、或は鶉であるとか、サウ云ふ既に宇宙間の美妙の音聲を表して居るものを寫生すれば、音樂が出来るかと云ふと甚だ夫は淺少のものだ、誠に一小部分のものだ、即ち音樂美術と云ふやうなものは彼の宇宙間に表れて居る所の自然の妙音の他に妙音の以上に非常な妙音を發さなければならん、非常な美聲、非常最上の妙音を發するのが音樂の目的である、繪畫も夫と同じとて例へば此の亞細亞では餘り人の身軀を書くのを高しとしな、西洋では人の身軀を書くことを高きものとする、其の所謂亞細亞では佛教などに於て人間の肉軀は五慾の塵などとして居つて卑んで居つたものだからして、人間の身軀を最上美と見なかつたのである、西洋

の方では人間の身軀を最上美としたのである、夫だから西洋では身軀の美を非常に描く、裸體畫などを非常に描くが、夫に人間の表はれて居る所の極く宜い美術の身軀を描くなれば、夫が終局の目的とは決して居らん、人間の身軀の實物があるより何倍も美しくしいものを想像し出して形作るのが目的である、山水でも天然自然の奇景妙景を寫すのが終局の目的ではない、終始繪畫を離れぬ所の種々無量の妙靈を發揮しなければならん、其所で寫生は其の畫工が必ずしも學ばざる可からざる一部分であるけれ共、これを以て終局の目的とするとは出來ないのであつて、其の寫生と云ふものは先づ程路遼遠な此の美術道から云ふと途中にある所の稍やなし易さものであると見えて、彼の國立美術學校などでも寫生彫刻などは僅かに専門の彫刻科に這入て二年位稽古した書生が、或る魚鳥の類を寫生して居るとか、或は花卉などを寫生して居るとか、云ふ寫生彫刻は實に立派のものが出來て居る、夫は所謂

彫刻の名人と云ふ所の左甚五郎とも古色が就いたならば斯んなものであらうかと思ふ程の寫生の美しくしいものが二年生位が遣つて居る。然るに寫生以外に妙用を發揮する高尚雄大なものになつてはナカナカ二年や三年で出来たものではない。夫て有形美術に於ても寫生といふものは頗る要用のもので必ず學ばざる可からざるものであるけれども、これは必修の學問の一であつて且其の程度と云ふと最高最終のものでないと思はれる。其の美術道の最上乘の所に至つてはナカ／＼學校學問などの遙かに及ぶ所ではない。學校學問は僅かに其の基礎地盤を作る位のものだ。家て云ふたら基礎と骨組を作る位のものだ。

心術の修養

初近來美術の流行はナカ／＼盛んになつた。今を距る凡二十年前に我が此の美術の調査をした頃に比すると今日は雲泥霄壤の違ひで、一

寸と近く例を云うて見ると彼の頃は今日日本第一の畫工と云はれる橋本雅邦の如きものが海軍省で繪圖を描いて僅かに十二三圓貰つて居つたものである。今日矢張り第一流を以て尊ばれて一ヶ月の收入が六七百圓あると云はるゝ川端玉章の如きものが、畫工も月十圓の極つた收入があれば結構のものですと云うて居つたものである。夫が今日ア、云ふ勢をなしてサウして社會至る所に美術道は行はれてナカナカ用ゐられて、美術家もドシ／＼多數に出来て来る。夫れ程盛んに行はれて居つて如何にも展覽會などを見ても以前に比べて見ると比す可くもあらぬ程能く出来て居る。大層違つて居る。其如何にも此の盛んの中に吾人をして感動させると云ふ程の傑作優物と云ふものは矢張り顯はれて來ない。作者があつても夫程の非常なものが出来て來ない。これは一の大疑問である。夫は僕が段々心配して見ると畢竟根本たる心術の修養が足りないのだ。心術の鍛煉養成と云ふものをしないの

だ有形美術と云ふものも其の形に表す所の技はこれは技術者のとて悪く例へて見ると下女が水汲みをするのも下女が米を洗ふのも車夫が人力車を牽くのも船頭が船を漕ぐのも業といふとに至つては同じ事である唯だ一方は餘程面倒な難澁な手數なものである一方は單純なものであると云ふだけの差異で技術に至つては均しく技術手藝であつて夫で其の技術と云ふものも修養がなければ有形美術はなりはしない夫はなりはしないけれども其の技術たるものが如何程修養されても何程上達しても其の根本たる心術の鍛煉修養が出来ない以上は此今日儕々多士なる世の中に於ても非常に雄大に最高に至優至美に伸るとは出来ない昨今に至つては餘程此の技術の途は開けて大層宜くなつたけれどもドウでも北の根本たる心術の鍛煉修養を大に養はなければ誠に前途覺束ないのだ。

正倉院の珍寶

諸君が畫工でもないのに専門者に云ふやうなとばかり云うても面白くないが一つ此の日本の仕合せとなるとの面白い話をしやうが先刻云ふた支那の歐羅巴などのやうな革命の亂があつたら非常な激烈な非常な残酷極まる大戦争杯を遣つて天下人民は流離顛沛して後朝の勢力を爲した時には前朝の人民は半分ばかりも死んで仕舞ふと言ふやうな國柄に逆もない所の日本には神品が澤山あつて一寸と申せば正倉院の如きは萬國に會てなき結構な所でア、云ふものが保存されて居る其の正倉院の歴史を見ても其の以前のは細かく分らないけれ共鎌倉時代から明治に至る迄七百年の間に彼の正倉院のお倉を明けたとが七十二遍よりない丁度十年に一度より開いて居ない彼の近來は我輩杯が御勅封開役を仰付つた際は有難くも單純なとて

勅封をお下げ下さつて輒く開くやうな譯になつて居るけれ共近く舊幕の時代でも彼の正倉院を開く時には四百俵から五六百俵の米の入用があつた關白が勅封を奉戴して京都から出かけると云ふやうなとて、サウして勅封を切て御倉を明け後に勅封をして歸るのだから大層な事であつた夫て例の信長が拜觀して蘭奢待の幾分を截て頂戴したといふとて後世の學者がやかましいが信長が切つた跡は只今もチャンと分つて居る、サウ云ふやうな譯で正倉院のお藏が千二百年前の聖武帝の御草鞋御杖迄が残つて居ると云ふやうな世界無比の國柄で夫は全く萬世一系の有難さ貴さ稜威で斯の如く保存されて居る夫と繋がつて又先刻も云ふ通り日本で大戦争があると云うても大陸地方の大戦争に比較て見ると奴婢か石の投合をするやうな小さなもので、サウ云ふ國柄で革命の亂もなし非常な殘忍劇烈な戦争も遣らず源家の八幡太郎義家だの頼朝だのと云ふ人は大分殘忍のとを遣つた

けれ共夫ても大陸諸邦の戦争に比較して見ると殘忍の加減も低く小さく且つ皇室に對し奉りて凌辱を加へやうとか御倉のものを奪はうとか云ふとは夢想にだも無いとであるから日本は幸にして代々の文明の遺跡は瞭々乎として残つて居る。其所で先頃も或る學者等が二人支那の美術を調べに行つた、夫て六ヶ月間かゝつて支那内地の美術を調べて、ナカ／＼實物の探検を能くして立派な報告書を書いた、六ヶ月はナカ／＼永い月日である、其の報告を我輩讀んで見た所が、ナカ／＼イントレスチングのものだが、ドウも此の男等は日本の最も寶庫とも稱す可き奈良京都和歌山近江などを調べないのであらうと云ふ想像が起つたから、其の學者に向つて、君等は彼の邊を調べたか、と云うて聞いた所が、未だ調べないと云ふから夫ては、マゝ一度行つて來るが宜いと云うて種々なガイドを與へてやつた、サウしたら其の人等は出かけて行つて僅かに廿五六日て奈良と

京都を調べて来た、サウして歸つて来て云ふのには實に日本と云ふ所は誠に結構な所です、支那に行つて半年調べるだけのことは、日本では二十日か三十日て出来て仕舞ます、夫も即ち一の事實である、現在支那の方チャ六朝五代唐宋より元朝明朝のものなどが向ふにあるよりか日本に来て残つて居る方が澤山ある、これは即ち後世の模範として後人の標本となす結構なものが支那地方の如きものは、夢々として晨星の如きものであるのに、日本には瞭々乎として澤山残つて居る、丁度夫と同じ事で百事文明がズツと繼續して多少高低はあつても一寸とも絶へないて行くのだから實に旨いものだ、併し其の面白い話の中に唯だ一ツ悲む可しとするのは、日本の畫聖と云はるゝ巨勢の全岡の畫であるが、マ、日本で畫聖と稱へて居るのは、巨勢の金岡一人を云つて居る、矢張り金岡と雪舟を畫聖と云はなければならぬと思ふが、其の雪舟の畫の如きは實に大作優物も澤山幸に残つて居るが、又金岡以前の

天平時代の即ち千二百年前の傑作優物も残つて居る、其の次の百濟の河成は残念の事には現物は焼失して仕舞つて居らないけれ共幸に餘程宜いには高山寺の立證房が六百年程前に百濟の河成のものを寫して置たものが残つて居るから十分に百濟の河成を見ることが出来る、夫からして其の少し前で曇徴と云ふ人の描たものも残つて居る、これは果して曇徴が畫工であつたかといふとは、歴史に依つては明瞭わからないけれども、曇徴は利銅頃の人で果して自分で描たが、其の頃他に大名人があつたが、兎に角古いものか残つて居る夫が曇徴と云はれて居る。

巨勢金岡の名畫

其所で畫聖と云はるゝ金岡に至つては、歴史上には昭々乎として大名人であつたことが表はれて居り、金岡なる人は昔公なども親しかつた

人であるらしく見えて居るが誠に悲しいとは僕等の見る所では其の金岡といふ大人物の畫が或は残つて居らんやうである併し其の金岡と云はるゝものは僕等の調たものでも四五百はある夫から其の四五百中で最も著名なものが十點ばかりある其の内八點ばかりは

川村傳の那智の瀧

智恩院の毘沙門

川崎正藏の寶樓閣曼陀羅文珠尊

法隆寺の蓮の畫の屏風

原善三郎の地藏尊

仁輪寺の聖徳太子

井上伯の觀世音

備前の杉山の風神雷神

等も残念のどに何れも金岡でないといふ僕等は認定するのだ如何にも是

程日本には能く残つて居るのに畫聖と云はるゝ金岡の眞物が残つて居ないと云ふとは實に残念のどだ併し金岡の畫の寫しもない金岡の眞物と覺しきものもない四五百もあるのに一も金岡と認めないと云ふのは一體何を以て評するのか何等の根據によつて金岡と云ふとを定むるのだと云ふ議論が起らなければならぬ夫は金岡を産出した所の弘法大師とか百濟の河成とか云ふものがあるからして夫で幾分か金岡を想像することが出来るサウして金岡は即ち總てを集めて大成した人であるに違ひないが其の金岡が産出した所の相見であるとか巨勢の弘高であるとか云ふ大家が残つて居る所の弘法河成などの金岡を産出した所もあり又金岡が産出した人もあるからして夫に依つて金岡を想像しなければならぬ又想像し得るとであるのだこれを一評して見ると

川村の那智の瀧

と云ふものは時代は金岡を距る二百年も後のものであらうがナカ
ナカ結構なものであるけれ共、畫聖と云はれる金岡ほどの優秀のもの
ではない。

智恩院の毘沙門

これは如何にも強いもので、堅實なもので時代も確に千年以上あると
思はれるけれ共、優麗の所を缺いて居るし、稍や固澁な悪く澁つたやう
な跡が見える、迺も金岡ではあるまい。

川崎の寶樓閣曼陀羅、文珠尊

寶樓閣マンダラこれは眞に結構なものである、且強いもので古いもの
である、併し畫聖と云はるゝ人の優麗の點を缺てをる、川崎の文珠尊は
如何にも優美のもので如何にも緻密のもので、且云ひ盡されぬほど美
な所もあるけれども千年以上の畫とは見え、且雄大にして英雄を泣
かしめると云ふ程には見えない。

法隆寺の蓮の畫

と云ふものは、ドウも日本畫でないと思はれるこれはドウしても支那
であらうと思はれる。

原善の地藏尊

は誠に美麗な緻密のものであるけれどもこれも時代が三百年も四百
年も足りない、夫程雄大なものではない。

仁輪寺の聖德太子

と云ふものが非常な優麗な大手腕で、如何にも結構なものだけれども
金岡は外國で云へばドウしても唐朝以上の氣韻を帯びて居らなければ
ならんものである、然るに此の畫は外國で云ふと幾分か宋朝の氣韻
を帯びて居る、殊に時代が許さない、ドウも非常に結構なもので繪畫の
上乘であらうけれども、幾分か最早や宋朝の氣韻を帯びて居るやうだ、
ドウしても金岡の時代には遙に足りない。

・井上伯の観音

此畫は中々優美なものであるが時代は七八百年であらう且観音の本
躰は最上乘の畫ではない附帶の山水丈を見ると最も優秀であるが殘
念なことである。

岡山の杉山の風神雷神

は金岡より五百年も後のものだらうこれはマ一論ずるに足りない。
其所で金岡と云ふものは絶無だ不幸にして一品もないといふの他は
ない高山寺の玄證房と云ふ人が非常に名畫の模寫臨寫をして置いて後
世の爲に結構なことをして置たことだけ共金岡の畫を一枚も模寫
して居ない其所でこれはまぐれ外つれの不幸のことであると思つて
居つた所が近年一つ僕等が見出したものがある夫は世間には餘り名
高いものでないが税所子が持つて居る所の聖德太子三尊の畫である其
の畫といふものは最前云ふ所の著名の金岡と云はるゝ九ツばかりの

畫の中で仁輪寺の聖德太子に稍や並ふ可き力のものでサウして確か
に見る所では仁輪寺の聖德太子に比すると此の聖德太子三尊は百年
や二百年は古いやうに見えるサウして非常に雄大でサウして剛勁で
サウして壯麗で森嚴でサウして優秀で高尚でサウして嚴正で夫で温
雅で矢張り繪畫の上乗であるサウして一つ其の他を取らば奈
良の法隆寺に小野妹子の筆と云はれて居る毘沙門三尊がある其の小
野妹子と云はるゝのはこれが或は金岡に近いものではないかと思は
れる夫は逆も小野妹子などの古いものではあるまい丁度時代が金岡
時代のものかと思はれるそれは矢張り非常に結構のものである其の
畫の吉祥天が今云ふた所の聖德太子三尊の其の脇子(脇に居られる童
子の相貌趣致と全く同一だ夫でこれに依て先づ日本畫聖の畫が不幸
にして日本に無いと思つて居る所に先年來これを見出して我輩同志
は雀躍して喜んで居る。

此の畫の他には如何にも能く残つて居つて、確と金岡と信じ得られるものはない。

美術と貿易

夫で僕等が此の日本畫寶物の後世の模範となり後人の標準となる品物を取締にかゝつたのが、公使をして海外在勤中から建議なんかをして、サウして任滿ちて歸つて來た、夫からモ一公使は無任所にして貰つて、サウして取かゝつたのは明治二十年であるが、其の二十年が此の取締にかゝるのが既に遅いので、今十五年も早やかつたら實に宜かつたであらうと云ふとは山々表はれて來たけれ共、僕は海外でも最初行つた時二度目に行つた時も、三度目に行つた時も、好の途だから東洋の美術が保存されてある所では、大抵氣をつけて見に行くやうにして多く見て回るとを勉めたが、如何にも日本の宜いものもナカク、餘計海外

に飛んで仕舞て居る、又海外に飛ばない迄も非常に消滅したのである、けれ共、一つ幸のとは、東山以前の美術といふものは、餘り海外には行つて居ない、東山以後の美術の通俗の入り易い美術品は、澤山海外に飛んで居るけれども、殊に蒔繪などいふと非常に飛んで仕舞たもので、蒔繪、刀劍、小道具、陶磁などいふものは、澤山海外に飛んだ繪でも、近世のものは、餘程行つて居る第一蒔繪と云ふと、ボルチモールのオータースと云ふ人が一人で所持して居る日本の蒔繪が、加州の前田家とか、或は尾州の徳川侯爵とか、或は藤田傳三郎氏とか、或は三井八郎右衛門男とか云ふものを除いたなれば、オータースが日本を四つに分けて、其の一部分位は屹度持て居る、一人しても、其の位のことだ、大變に飛んで仕舞たけれども、通俗の眼に入り難い所の東山以往の美術品は、餘り海外には行つて居らない、何れの國でも古い所の美術は大抵此の宗教的のものであるが、日本でも東山以往の美術は多くは宗教的のものがある、其

の宗教的のどが通俗の人の眼には極く入らないが況んや外國人の眼
 なんぞには誠に入り難い、これで幸にして佛畫の宜いものは更に行つ
 て居らない、又海外に行くと云ふとも強ちサウ又恐れるばかりでない、
 例へば妙珍の作つた鷲と云ふものが倫敦のケンシングトンのミウジ
 ヤムに高く据へられて居るが彼の品の爲に日本の名聲が何れ程廣ま
 つて居るか分らない、又海外に對する勢力を考へて見ると、日本人は金
 を作るとが下手である、戦争は大變に強い最も日本人種の勇氣などが
 表はれて來たのは廿七八年以後で餘程表はれて居るけれど、其之は西洋
 人の眼から見ると支那人が腐敗つて居つて非常に弱い爲ア、云ふ結
 果になつたらうと思ふたが、先達ての北清事變では、スツカリ分つた、歐
 羅巴の兵隊と比べて見ると支那人もナカ／＼強かつた、夫が爲に日本
 人は非常に強かつた爲にア、云ふやうなとに行つたと云ふとは分つ
 た、日本人が戦争に強いと云ふとは分つたけれども、併しサウ戦争に強

いばかりでは眞正の勢力を十二分になすとは出來ない、戦争に強けれ
 ば彼は威敬するであらう、併し親切に日本人を愛敬すると云ふとを保
 たなければならん、夫に此の美術などと云ふものは國民の信義の高尙
 な友愛な慈仁な標準と、忠孝の正實な美質などを表はすのには最も宜
 い手本であつて、此の途の發達して居る國は非常に歐米各國の如き文
 明國の爲には愛敬を受けるので、夫は遂昨年も亞米利加のホーレイと
 云ふ人から我輩の許に寄せた手紙が有馬雜誌に載せられてをるが日
 本人の經濟に短なる日本人の商賣に拙ないなどを大層憂ふると同
 時に其の末に以て來て日本の戦争に強い事を非常に譽て併しドウし
 ても美術文學の如きは武力と相まつて兩輪兩翼とも見做さなければ
 ならんもので、國民たるもの、眞の世界各國に相對する途に於ては如
 何にも必要にして缺く可からざるもので、ドウゾ此の途の衰へないや
 うにありたい、お前さんも病氣でも飽く迄其の世話をなされるやうに

ありたいと云うて懇々たる手紙であつた、サウ云ふやうな次第で美術といふものは國家の組織上唯だ其の一分子をなすものであるけれども、世界の程度が文明に進めば進む程これは矢張り有力のもので有力な道具である、一寸と又必要な實例を爰て擧げて見れば例へは此のマテリヤルの普通の商賣上で西洋人と競争をすると假定する、亞米利加と云ふ所は日本の非常に必要な商賣場所である、日本人が歐羅巴に捨てる金を亞米利加が日本に向つて償つて呉れるといふやうな譯で、實に亞米利加は日本に取つては非常な好市場である、其の亞米利加に普通の商賣を以て闘ふといふには、先づ商賣の一番の道具は何であるかと云ふと商賣の一番の道具は電信郵便運送も智識であらう、素より互市の物質は勿論であるけれども所が今日殊に此の歐米の社會といふものは此の流行……フワツシヨンと云ふものが非常に變化する甚きに至つては一のシーズン即ち三ヶ月か四ヶ月の交際期節に於て流

行と云ふものが三四度變るとがあるア、云ふ文明など、云ふ風になるとア、變る可きものであると思ふ、此のフワツシヨンの變る例を擧げて見ると日本から行く麥藁帽子と云ふものが始めて亞米利加に行つた時は何でも三弗五十仙から四弗位になつたものだ、夫が僅かに二三年立つて三四弗になつたものが二十五仙位に落ちて仕舞て夫でも賣残つて店頭に塵埃だらけになつて積んである、ナカ／＼日本人の十年も前からのもを用ゐて居るやうな譯とは雲泥の差である、サウ云ふ國に向つて今いふ所の商賣上の智識夫から電信郵便運送何にも敵對ない歐羅巴人と日本人と亞米利加で競争する場合に當つて、歐羅巴人は電信を打つのに一語二十錢位で往くだらう、タイムは三時間位で往きませう所が日本人が電信を打つのに一語二弗位かゝるだらう、タイムは二十五時間位かゝる、郵便も夫と同じやうなもので、價は高くなければともタイムが違ふ又運送は大變だ、歐羅巴は片路六日位では取

り遣りが出来る日本はニューヨークに往くには、パナマから回して三四十日位かかる、運送費といふものも夫に相應して餘計かかる、サウして況んや其のフワツション流行に應ずるの智識が乏しいと來て居る、其のフワツションを先へ回ると云ふとは非常の智識がなければならぬ、サウするとフワツションと競争して能く此の商機を失しないやうにするのは、逆も出来ないに違ひない、運送には費用が餘計かかり、タイムが餘計かかり、商業上のかけひきする電信郵便の便が悪いとする時は、ドウしても歐羅巴人に勝ち能はないといふとは、チャント分つて居る、これをドウして勝を制したら宜いかと云ふと、其の點になると工藝物に關しては、美術考按意匠工夫の部分に於て勝つより他に方法はない、由來歐米人が美術を尊崇するといふとは、大變なとて、即ち流行の美術で勝を制するなれば、美術の上に立て、美術を制御すると出来る、流行の下に立て、競争をすれば先に云ふ如く、大勢既に敵し難

美術と殖産

い、流行の上に立て、流行を制すれば、即ち日本の美術が非常の力を以て上進して、非常の力を以て表はれるならば、列國人が日本の美術といふものは、途方もない強いものである、高尚のものであると、斯う見認めてくれるまでに進んだならば、即ち日本が流行の上に立て、流行を制御して、日本の美術が彼の流行を發動すると云ふと、までに遣りをしせたならば、サウしたら、實に旨いものだらう、夫より他に宜い方法はない。

又現今の重要輸出品、或は生糸であるとか、或は茶であるとか、其の他種々のものがある、之は、マーナ、なか、金高も大なるものであるけれども、今日の日本では、茶の如きは、決して見込はないとは、云はないが、此れは、ナカ、面倒なもの、それには、珈琲の本場も控へて居るし、容易なるとではない、今日の日本の技術工藝と云ふものが、海外に賣擴められたも

のは誠に少ないのであるが、焉んぞ知らん他日勉強次第で佛蘭西の如き美術の位置になつたならば非常に大きなもので彼の佛蘭西で美術の金の収入は大變なもので、サウして日本が幸にして何時しか其の地位に達して日本が美術を以て歐米のフワツシヨシを制すると云ふ地位に達する事が出来たならば、夫はナカ／＼日本の富を援けると云ふとは大變のとてあらうと思ふ、又一の美術の商賣法を考へて見ても今一例を引いて見ると、亞米利加の人が既往十年間の統計で、夏期休業は歐羅巴に旅行して費消する金が、丁度一億二千萬弗と云ふとである、亞米利加はア、云ふ廣い國であるから、ドウ云ふ涼しい所も又氣候の良い所もあらう、夫にも係はらず亞米利加の人が夏休みにドシ／＼歐羅巴に來る何の爲に歐羅巴に行くかと云ふと、種々の事情はあらうけれども、其の美術の力で吸寄せられる、亞米利加は新開國で美術が少ないから、其の美術を喝望する所から主に美術の力で吸寄せられる、日本が氣候

は宜し山水は明媚なり、海上は穩かであり、人民は誠に同化し易い人民である、漸々他國から文明を入れて調和し同化して行くと云ふ性質を有て居る日本人、況んや今日に於ては、結句西洋人を喜ぶと云ふ國であつて、若も日本の美術が勢力を進めて來たなれば、亞米利加からは少し海の上が遠いだけで、大西洋よりは、太平洋の方が波も穩やかであるし、漸々日本に這入て來るだらう、殊に美術が一番勢力を得たなれば、歐羅巴の例に比して見ると、十分亞米利加人を引寄るとが出来ると思ふ、これには十分美術の勢力を得なければならん、其の美術の勢力を得たなれば、先づ歐羅巴に彼れが遣る半分を日本に引寄せるとすれば、六千萬弗六千萬弗は、我一億二千萬圓で、一年に日本へ一億二千萬圓を年々儲けるといふとは、實に大きなものである、此の一方のとてもナカ／＼大きなものであつて、日本の力を進める爲には、ドンナに援助になるだらう、ナカ／＼これは小さい一部分のとのやうだけれ共、大きなものである、唯

だ今日まで未だ宜き方法を得ず、十分な發達もせず、又これに十分しられもせず、勿論力も十分なし、夫て斯う云ふ小さな隅つかうのものになるけれ共、元來美術といふものは社會問題になつて來なければならん、今迄の所では兎角……ドウかしてこれを我輩も社會問題にしたいと思つて居るが、ドウも床の上の置物だとか或は博物館の陳列箱裡に窮々乎として居るやうなものであつて社會問題にならない。

楠公の銅像

先年僕が僅かにやかましく云うて主張をして近頃皇城門外に立て居る楠公馬乗の銅像などもあれが日本帝國に於てア、云ふ風な美術的の獎勵の始めてある、あれが起つた時は一番始めてあつたが種々の事情に遮さられて漸く近年皇城門外に建られたものであるけれ共、あれ杯もア、云ふ大きな事業でもないが、我輩に取ては甚だあれが要用

な一機關であつた、あれは始め住友からして何か一二萬圓かけて何なりとも帝室に献上をしたいから、何か我輩に考案を立て、呉れと云ふとであつた、夫は住友銅山の紀念である、其所て我輩はこれはドウソ美術工藝的獎勵にして呉れる、スタチユーにして呉れると云うてやかましく云うて置いて住友の承認を得て、夫から其の『中世以後名臣の肖像』と云ふ表題で圖案の懸賞問題を廣告した、夫てマ一種々のものが出來た、千代田城外だからして太田道灌も出て來た、信長も出て來た、種々が懸賞に當つたのだが、夫はサウ云ふとは是非やり、遂げたいと斯う思ふたので、同時に何でも此の美術と云ふものは床の隅の方に押付けられて居る間は決して大なる發達がないと云ふとを堅く信じて居るか、これを社會問題にしたいと云ふのが又一の希望であつて、其の一大機關の起つたやうなもので、借其の皇城門外は楠公馬上の銅像を愈よ

建立すると云ふ時に、四方八方から攻撃があつた其の攻撃には最も有力なのは伊達宗城さんも建白をした東久世伯なども建白をして反對する、松平確堂さんも公然反對した、其外陰然妨げた人々は中々剛氣な連中も反對を援けたので悔る可からざる攻撃であつた彼の銅像は日本の畫工が圖案をしたもので彫刻者は高村光雲、後藤なんと云ふ人が其の緻が當つたので、一方に於ては西洋美術家が非常に怒つて種々の工夫を以て百方攻撃をした彼等はア、云ふやうなものは西洋流儀の技術家の仕事に極つて居るやうに思うて居る所に日本の美術家に籤が當つたから内々大變怒つたのも無理はない其所で西洋流儀のものは百方攻撃する又一方には日本の古い美術家が反對をするア、云ふ西洋の眞似をする日本美術家が衰へるといふので堂々と攻撃して居る夫れからして坊主連中も大變怒つた人の名前を云ふと可笑しいが中には友人の土岐法隆なども入釜しい議論を仕掛けてやつて來た

我輩も不得已公會演説を開いてこれを建てる所以又建てるのが然る可きものであると云ふとを演説したともある位で今から見るとをかしいものだが、又逆も日本の美術家彫刻家には出來ないと云うて居るものもあつたが、我輩はドウしても薄志弱行ては不可ない殊にこれは懸賞で偶然日本の圖案者に彫刻家に落ちたのだから止むを得ない逆も日本の技術家には出來ないなど云ふが、我輩は斷じて出來ると云ふた斷じて出來るとは云ふたが僅かに小さな肖像を造つた位の技術を見て居るので自分が技術者ではなし、斷じて出來ると云ふのは随分苦しいのであつたが、僕が一人氣張るより他は誰一人も氣張る人はない四面皆楚歌の聲である僕が一人一寸へこめば直ちに事業は丸つぶれであるそこでさばつた斷じて出來ると云うて廣言した四方八面の矢玉を打掃つて辛うじて行はれることゝなつた、サツして第一此の美術と云ふものは床の上の置物博物館の陳列箱裏に窮々乎として居る

やうてはならぬ、ドウしても社會問題にしなければならんと云ふを大に唱へて、ナカノ議論紛々として遂に許されなかつた夫故に據るなく恐れ多くも救許を賜はつて夫で漸く建立が出来るとになつた今から見るとあれしきのことにあれほどの議論が沸騰するなどはかしい様なものだ、僕は斯道の爲めに必要と思ふたから四方八面の攻撃に對してきざりとうしたから覚えてをるが其攻撃した人々は本物の建ち上つた頃には忘れる位のものだ、現に近年立上つた頃に東久世伯に向つて君等が當時の攻撃はひどかつたがどうかかうか建上つたから此上はスタチュエ、其物の是非善惡に就ていくらでも攻撃を引受ける積りだと笑ひ話しをしなければ、伯は殆んど忘れたるものゝ如くなるほどそんなものがあつたかいね、など云うて居る丁度そんなものて前にも改めて申した通り社會の萬事萬物殊に敵を持つ事柄の如きに關しては其の當時においては意外の情實を含むものですべての判断が

情實に冒され易いから中々其當時は公平の判断ができてきにくいずつと後々に至て情實をはなれて靜平で見るとはじめて公平の判断が出来ると云ふ、一小證據である此楠公銅像に關して當時の八かましい議論はやはり美術が社會問題になる一の門戸になつた、近來美術が少しく社會問題の形になりかけたと云ふのは彼れ等が一番の導きになつたものだけれ共、未だナカノ足りない、これから熱心に唱導して遣らなければ本邦美術たるものゝ光明を發揮するとも出来ない。

歌道

御歌所寄人 小出 榮 君

戀歌
昔の和歌に戀歌の多い理由てすか、萬葉などを見ると全然戀歌と云うても宜い、夫は昔の人は自然であるから自ら戀歌が多かつたものと思

ふ、段々世の中が開けて所謂美術思想が發達するに從つて花鳥風月を愛するとか、山水を賞すとか、其他にも歌題となるものが澤山出來たので昔は人情も質朴で花鳥風月と云ふよりは、先單純な思想即ち男女の情が自然に人の思想を支配した爲に戀歌が多かつたのであらうと思ふ後世文物次第に發達し山水を愛するとか、歌題となるべきものが澤山出來、それに依つて漸次歌を詠む人が出來たので、夫故古今集に至つて戀と云ふ部を設け始めて他の歌と別にしたので、代々の撰集も皆夫に習つたもので、追々人事も開けて開け復雜になるに從ひ、今日になりては戀の歌は凡て少なくなつたのも自然の勢で、私も今度「くちなしの花」第三集を出版しましたが、戀の部は別に立てませぬ。

近作

私の近作ですか……何も歌らしいものは有りませぬが、此間他で夢

と云ふ題で

「開け行く世に住なれて古は夢にも知らぬ夢を見しかな」世の中が段々進んで來ましたから、森羅万象皆な改まつて昔駕籠で歩いた道中か、人力車馬車汽車と云ふ様な風に進歩したものが出來て昔は夢にも見るとの出來なかつたものを夢に見る昔も夢と云へば至極茫然したいはゞ空想で、或は事實にないことも夢には見たものである、夫が爲め能く夢にも知らぬと云ふ事を云ひますが、それを取て今日では昔夢にも知らなかつたものを夢に見ると云ふ意であります。

斯様な風で歌と云ふものは理屈や學理的では否ない、抑も和歌の根元と云ふものは人情に基くので、自然に思想に浮んだ事を云ふのが歌です、然るに段々世が開け物事が頻繁になるに從つて、ドウシテも此道に志すものが一の技藝の様子に心得て仕舞た、元來は萬葉の東歌の様子に何なりと思ひ浮んだ事を云ふのが歌である、然るに今日は議論が熾んで歌

を詠むと云ふよりは、細工の方が主になつて仕舞たのは困つたものであります。

新派と舊派

中古歌道が衰へ陳腐に歸したと云うので近頃新派といふものが出来、或る方向には中々勢力を持つて居る様で、餘程思想も新らしいし、着眼も大分宜くなつて來たが、亦破壊主義で歌と云ふ範圍を脱して、往々發句の様になることがある、アレは私の首肯し難いこと、ドナ新題でも歌にならぬと云ふ事はない筈である。

夫て舊派の歌と云ふものは成程古人の様な傑作はないとしても、形式だけは歌の範圍を持つて居る、然るに新派は既に形式を失つて仕舞て歌と稱す可べ風情が全くなくなつて仕舞て居るのが往々有る、爰に公平に兩派を論じて見ると今の處では何方も宜いとは思はれない、新派に

は中々議論は上手な人がある様ですが、其歌はドモ……感心の出來ないものが多い、元來前にも云ふ通り和歌は論とは別物で、決して學理的では歌は詠めない、サレバ昔は賤女農夫までが詠んだものに旨いものがある、今の立派な學者が學理的で詠んだものに却て旨いのがない、と云ふのは人情の自然から出て人を感動せしむるが是が歌の本旨であるからであります。

ソレデ歌は萬葉を學ぶとか古風を習ふとか云ふがそれは否、其時代々々を代表するものであるから、今から萬葉集を學ぶといふ事は一の形式を學ぶに過ぎぬ、又歌の主意と云ふものは明治には明治の言葉を遣つてやる、又明治には明治の人情を云ふのが眞正で何時も古今集や奈良の都の流儀を考へて遣ると云ふ譯のものではない、上は王侯貴人より下は田夫野人に至る迄人情と云ふものは可愛らしいもので、人情から出た自然と云ふものは誠に涙も出てれば人に感動を與へも

するものである。夫から只今は大層歌に漢語が流行つて来て居ますが私は是も撥斥しないで取ります。人情がサウなつて来たならばそれでよい。人情が推移してサウ云ふ様になつて来たのなら云うてはならぬと云ふ制限はない譯で併し人が怪んで居る内は人情がまだサウでないのである。デ支那の詩にした所が歐羅巴の詩歌にした所か、文學技藝：：總て世の漸次進むに従て變化して行きはするが、人情國風と云ふものは動かない。支那は支那、歐羅巴は歐羅巴、日本は日本、どうしても夫を變更する事は出来ない。コレカラ日本の歌がドウ發達しても日本の歌と云ふ範圍は失はぬ様にせねはならぬ。世が開けると共に人情が薄くなるのは、自然の勢で仕方がない。古人を見ると馬鹿な顔をして居る様に思はれる。そこで斯う新派とか云ふ様に一の旗識を立てゝやると大層花やかに見えるし、さる所から意外に勢力も得る。併し歌道はどうしても人情をばづれてはならぬ。其時代々々の風俗を代表して行かぬ

ばならぬ。

眞 詠

歌を詠むには決して虚を吐かぬと云ふ事が肝心である。自分の眞正の事を詠むのが必要である。ソレデ或人は私の歌は餘り淡泊で歌と云ふ節がないと云つた事もあるが私は決してよくやらうと云ふ様な了見はない。宜からうと悪からうと私の其時の情に適當したものが出来るので、斯う云ふ大層な旨い歌を詠まうと思ふたからといつて、夫でサウ旨い歌が出来ると譯のものでもない。私の歌は意が深からうと淺からうと其時の情を詠むのであります。

題 詠

題詠の事ですが、何に依らず總て題を詠まうとする時は、先づ其題をば

見ずに題の真意を見て實境に這入て詠まなければいけません例ば紅葉を詠むとすれば自分が高尾なら高尾へ往つて紅葉を見た時には如何様であつたかと言ふ様に題其物の皮相のみを見ずに題其物の實境に這入つて詠むのが肝心であります。

印 學

中井敬所君

三代の印

凡そ印章と云ふものは其の用を爲すとも頗る大きなものでありまして又其の古事來歴ともに古いとて何れも支那に於て發達し日本に移つたものであつてお話は何れも支那の古事が多ふございます夫て往昔は尊卑共に璽と稱へましたが秦漢の世からして天子のお用ひになるものを璽と申まして諸侯以下臣民の用ふるものをば印と申すやう

になりました。

春秋合誠圖と云ふ書物に依れば『鳳皇圖を發して堯帝に授く』といふてある其の印章に曰く『天赤帝府璽』とあつたとのとてこれが印章の始と申すべきであらうと思ふ又夏殷周の三代にも印章はあつたとて湯は桀を放ち大に諸侯を會して璽を取つて天子の座に置ともあり又蘇奏は六國の相印を佩るとあれば三代に印章のあつたとはいふ明であります併ながら其の文其の制度などは詳には分りません。

秦漢魏晉の印

秦の始皇は既に天下を平定して藍田の玉を取て李斯に其の篆を命じ玉工孫壽に刻せました其の文に曰く『受命於天既壽永昌』とありましてこれを傳國璽と稱へました蔡仲平向巨源の二様の摸本を以て古玉圖譜にも甘氏印正にも載せてあります秦の小璽と云ふのは九字の璽で

あつて、秦篆と稱す可き璽であります。
 夫から漢の時代になつて益々盛んになりました其の妙所と云ふものは秦漢に過るものはありません併し印を作る者も泯然として聞ゆる人のないのは蓋し此の當時は皆な摹印篆を善くし増減結構を學び運臂も純熟し刀法沈着自然に度に合ひ悉く美を盡したものであります。世上に古印を集めた印譜も多くありますが其の中には精選なるもあり又疎なるものもありますから能く鑒別しなければなりません世人動もすると古銅印にさへ遇へば輒ち漢銅印と申ますが實は悉く漢の物ばかりではありません印文は古茂渾雅で章法も奇正相生じ刀法は圓厚蒼潤で識者をして手を措く能はざらしむるのがこれが眞の漢の古銅印であります古銅印には録印刻印鑿印とあります刻印は往々鑄印の精にかざるものがあります鑄印には撥蠟翻沙

梅庵雜志錄印法有二。一曰翻沙。一曰撥蠟。翻沙以木爲印覆於沙中作範。

如鑄錢法撥蠟以黃蠟和松香作印刻文製鈕塗以焦泥俟乾再加生泥火煨令蠟盡泥熟鎔銅傾入之則文字鈕形俱清明精妙。

『朱象賢印典』

の二法がありまして其の中でも撥蠟は最も精巧なものであります。魏晉の印は漢印に基いたものの中には往々易るものもありますが大なる失はないもので又法とるに足る印が澤山あります又魏氏春秋に相印と云ふものがありますして、

曰允善相印將拜以印不善使更刻之如此者三允曰印雖始成而已被辱問送印者果懷之而墮於廁

又相印法はもと陳長文に出で長文これを以て韋仲將に語り印工の楊利は仲將に従つて法を受け其の法を以て許士宗に語りました又楊利と云ふ人は此の法を以て吉凶を占ひますと十中の八九は能く當りましたと申します韋仲將は陳長文に問ひますのに貴所は誰に従つて法

を得たかと申しました所が陳長文の曰く『本出漢世有相印相笏經』と答たさうであります。

六朝以下の印

夫から六朝の印章に至つて始めて一變して遂に印章に朱文白文などを作りしました後唐の世になつてからは六朝に因つて朱文を作り屈曲盤旋の印は多くありますが六義指事象形形聲會意轉注假借にも悖り古法も乏しくなりましたが此の時に祝思言と云ふ人がありまして唐の禮部鑄印官といふ役目を務めて世々繆篆を講習する家でありましたが後に此の人は僖宗に隨て蜀に入りまして子孫は遂に蜀の人となつた。

降て宋の世になりましてからは唐制を承繼て文は愈よ支離し古法を宗とせず多くは單に織功を尙びました乾德三年に太祖詔を下して

重鑄中書門下樞密院三司使印先是舊印五代所鑄篆刻非工及得鑄印官祝溫柔臺省寺監及開封府興元尹印令溫柔改鑄焉

と云ふとが宋史輿服志に載て居ります此の祝溫柔と云ふ人は祝思言の子孫であります又嘉祐八年に英宋即位受命璽を作るに當つて歐陽修(字永叔)に命令して其の文を篆せしめたのとてありました其の文に曰く『皇帝恭膺天命之璽』の八字を現はしました。

又姜夔(字堯章)は集古印譜一卷を著はしました又王球(字裝玉)が著す所の嘯堂集古録には古印數十方(印章は方と云ひ個と云ひ鈕及び奇といふ)ありまして論説も亦最も詳であります又王厚之(字順白)は復齋印譜を著し晁克一は圖書譜を著しました又顏叔夏(景園)は古印譜二巻を著はしました。

又宋の宣和印史もありますがこれは傳はりませんこの宋の末に至つては稍や印章の道も古法に復しては參りましたが彼の南渡の後(所

謂南宋は秦漢に比較して見ると大に倅つて居ります。夫故に古人も所謂宋は南渡より印章を知らず、抔と云ふのであります。降て胡元の代となりましては、王莽居攝の六文（古文奇字、篆書、佐書、繆篆、鳥書）秦の八體（大篆、小篆、刻符、蟲書、摹印、署書、殳書、隸書）も盡く失ひ印も亦之に因て絶て知るものもなくなりまして、至正の間に五丘字行、趙文敏、子昂は復古の意がありまして、吾子行は學古編を著はしました。此の書物にはもと印も載せてあつたのであります。今日傳はる所の學古編には印は載つて居りません。又趙子昂も印史一卷を著はしてあります。其の自序に曰く

一日過程儀父示余寶章集古二編。則古印文也。皆以印印紙。可信不誣。因假以歸。采其光雅者。凡摸得三百四十枚。個且修其考證之文集。爲印史。漢魏而下。典刑質樸之意。可彷彿之見矣。

とあります。蓋し趙文敏は寶章集古の一編を摸鑄したものと見えます。

が今傳はりませぬのは遺憾であります。又錢舜舉も摹印を善すとあり。虞集（字伯生）は文宗奎章閣の二璽を作り、虞集に篆文を命じました。一に曰く天歷の寶一に曰く奎章閣の寶とあります。又王冕（字元章）は始て花乳石を以て印を作り、揚据（字元誠）は明仁殿寶洪禧二印を篆しました。顧瑛（字仲瑛）は自製の竹根印があります。文曰玉山完璞。款識に金粟道人製の五字があつて、竹癡畢漉の秘藏する所であつて、廣堪齋印識と云ふ書物に載せてあるのを見ました。

明

初明の印といふものは宋元に因つて成立て居りますから、秦漢に法るとは出来なかつたのであります。が文太史徵明の印と云ふものは雅にして俗ならず、清にして神ありと云ふやうな風で、六朝陳隋の意を得て、蒼茫古樸に至りては、略人の逮ばぬ所がありました。降つて嘉靖間、文國博、彭が出てより、印學の一道を開き、力めて能く秦漢の古法を追慕探究

し六朝以來の衰頹を興起したのであります其の頃有名な人としては
 何雪漁蘇嘯民等あつて人々皆な印章の真趣を知つたのです又武陵の
 顧光祿の家は三世博雅好古の士あり其の祖御醫公世安氏を始とし秦
 漢の古印を集め汝由汝脩汝和天錫等代々子孫連綿として遠近を搜つ
 て購求して餘さず乃ち古玉印古銅印一千七百有奇を蒐め得て愛玩し
 て居つた隆慶六年に至つて印譜を著はして同好の人々に頒與する僅
 に二十部然かも好古の士は創めて秦漢印章を賞鑑するとも知りこ
 れと同時に古法の則る可き制度あるをも解した故に此の譜は盛んに
 世の中に行はれ射利に急たるが爲に梨棗に雕ばめ割腕氏は文義も刀
 法も知らずして只一概に翻刻しました因て古人も「印章備於顧氏壞
 於顧氏」など云ひました又甘旭も「印章之荒自此破矣」と云ひま
 するし朱脩能も印譜一大厄者と謂つてあります此の顧氏の集古印
 譜のあるので秦漢の印章も制度も後學の者は知るとが出来ました又

萬曆間に來行學と云ふ人は仿宣和印史を著はし甘氏の印正もあり學
 山堂主人張夷令は當時の名流巨手に印章を乞ひ索めて學山堂印譜を
 著はし明代には印學も頗る盛大に振ひましたれば従つて名人も多く
 表はれて居る先づ秦漢に溯りました明人の印に巧みなるものは文國
 博の外にも其の概畧を云へば何雪漁の蒼老なる蘇嘯民の雄健なる王
 梧林の渾厚なる吳亦歩の秀勁なる何不違の襍出朱脩能の各體兼長各
 と極めて盛んであります

清

清朝の初めは又一變して官府私印にも印篆の旁に滿州字を附した印
 もありましたが康熙に至つて明賢名手の法を慕ひ王會麓などは文三
 橋の正宗を唱へ印も亦た頗る端莊大雅て苟くも纖巧の習氣もなく又
 汪啓淑は王會麓を初めて識りし時は歲既に七十を踰へ視聽尙ほ衰へ
 ず其の後年殆んど百齡にて化し去つたと云ふ又許實父胡曰從程彥明

程大年、林晋白も繼で興りました、乾隆に至り太平も續き、文雅の士輩出し、印章も漢に櫟し、秦に凌ぎ、競つて復古の意あり、金石文、説文學を益す講究し、巨手名流も盛んに興り、枚擧するとも出来ません、蘇州には顧雲美あり、徽州には程穆倩あり、杭州には丁龍泓あり、夫故に吳門の人は輒ち雲美を宗とし、天都の人は輒ち穆倩を宗とし、武林の人は輒ち龍泓を宗としました、又飛鴻堂印客も夥しくありますが、徐友竹、陳在專、吳陶宰、沈六泉、林鶴田、張燕昌、陸鐵簫と余國觀、周子芳、各々妙處の觀る可き所があり、莆田派、江西派、雲間派、浙派などあつて、皆な祖とする所ありて、莆田は林晋白、江西は顧雲美、雲間は程穆倩共に正派と稱へます、浙派は丁龍泓を祖とす、蓋し此の一派は古拗、隋折、直ちに秦漢を追ひ、急就爛銅の二章法を折衷し、何雪漁、蘇嘯民の外に、別に兩浙に一幟を樹て、其の方折峻削は天發神識の碑、及び魏碑の隸體に仿ふものもあり、黃易、蔣仁、奚鐵王、陳曼生、陳秋堂も繼で興りました。

以上お話ししたとて印章の大體のとは盡しましたが、尙ほ後學の人の參考にもと思ひますから、印章の効用及び方法等に就て一言を加へて置きます、抑も印學の一道も雕蟲の小技でありますが、信を傳へ、奸を防ぐもので、帝室にあつては國璽となり、官府にあつては官印となり、佛家にありては心印となり、詞壇にありてはこれを以て、眞蹟を鑒別する等、人生社會に一日も缺く可からざるものであります。

往昔蒼頡より以還各體變じ、鐘王に至り古法蕩然となると雖も、只印章にのみは今に至りて變じません、其の篆體にも正變ありて、繆篆即ち摹印篆で、字畫は繁なれば減じ、疎なれば増す、これ隸と相通するので、然れども一筆の増減も皆な法度があります、若し曉らなければ六義に悖るのです。

又六書の扁旁に味ければ、笑を大方に貽すのであります、譬へば姓名の印を刻するに篆缺がある、是は後世字であるか古字であるかと云ふは

考古通用の字があつて其の字を用ふれば説文正字にも協ひますが、姓名の字と云ふものは正書に因りて本字に就き偏旁を合せ刻するは蓋し姓名印は信を示す所以で改易すべからざる故であります、若し成語間雅の印は即ち須く考古通用の字を用ゐて遣らねばならぬ、偏旁合體の字を刻すれば杜撰の譏りを受けます、これが六書偏旁を講究せねばならぬ所以であります。

印には篆法、章法、刀法との三法がある、篆法、章法は難いけれ共最も難いのは刀法である、篆法、章法は學べは致るものであるが、唯々刀法は心に得手に應じてなるものでありますから、容易に似て却つて艱辛であります、前説の如く乾隆以下は正派、蒲田派、江西派、雲間派、浙派、鄧派など各派がありますが、要するに秦漢の遺法を失ひません、篇法、章法、刀法共に古意を存するを以て妙手とも賛賞されます、若し某派が盛んである、正派は端莊に失すると申して、唯だ時の嗜好にのみ流れますると、秀潤の

氣も乏しくなつて人の奴婢となるに過ぎませぬ、眞に秦漢の遺法を仰ぎ、歴代名流の篆法、刀法を玩味し、衆の長所を集めて我に歸すれば、これ自から大成をなすものであります。

謠 の 話

由 來

三井得右衛門君

謠は古へ謠または諷なと云ふ文字を用ゐましたが、これは能に用ふる所の歌詞を指して申されたもので、近頃謠曲とも云ひますが、それは歌や小唄などに混合しないやうにウタと云はないでウタヒと申たものであります、夫て謠と能とは始終離る可からざる關係のあるもので、結局演劇に淨瑠璃と云ふやうな關係がある夫て此の謠の起原と云ふものは種々の説もありますが、能の起原が即ち謠の起原でありますから

能のとを以てお話しするが適當だと思ひます。能は素も能と申して猿樂から出たもので、中古王朝時代には神樂、東遊、大和舞など申て高尚な音楽でありましたから、先づこれを朝廷の御神事に用ひられましたもので、夫から徐々世が變るに従つて此の音楽も一變して結局今日のお能并に謠と云ふものは幕府時代即ち武家が政權を握つてから以來に出来たものであらうと信じます。是等の事の詳細などは種々の著書もありますから、諄々しくは申しません。

修業

謠曲の修業をする事に就て云へばドウしても二十歳前が宜いやうである。然し三四十歳になつてからも出来ないことはありませんが、成る可くは二十歳代の稽古の方が宜ろしい。初めて稽古するには先づ師匠に謠つて貰つて、そして後から付て行くのです。が最初は節付に注意し

ないやうにするのが殊に肝要であります。御承知の通り昔は能役者といふものは、政府から扶持を戴いて居たものであるから教へる方にナカナカ權利があつて教はる方はどうして平身低頭で習ふたものであるが、當時は全く之れと反對で、教へる人よりは却て稽古する人が威張て居ると云ふ躰裁である。夫れて稽古は往昔のやうに六つかしいとは無いのです。昔の教へ方は等級を付けて教へたもので、奥許でも何でも確然と此の等級に依つて其人の力だけのものを稽古したもので、家元(觀世家)でも此の等級の表といふものがあつて、それを實行したもので、らしい併し今では其等級表に由らずに最初羅生門とか土蜘蛛とか一番か二番も稽古すると直ぐに熊野だの松風だのと云ふ様なもの習ひたがる人が多い。それは畢竟教へる方に見識かないからであらう。近頃は今申す通り弟子の方が威張て居るものであるから、大抵十番か廿番も稽古すると九番ならひなとをして家元の直弟子の免狀を貰ふと

云ふやうな有様になつて居ります。夫て今の稽古といふものは家元などでも餘り力が入らない、つまり骨折て教へる張合が無いのである。それに家元の方でも亦此の間までは内弟子もなく一人て三十人も三十人も稽古するのですから、サウ鄭寧に教へて居ると時間がかゝつて仕方がない。夫てドウでも粗雑になる。それでも稽古を受る中でも天狗の人などは夫て宜いと思つて整しひに仕上げては段々六つかしいものを稽古するので、眞正のものにならずして可笑い一種の節になつて仕舞ふ世に云ふころ柿流とかに成り固まる。夫れて本人は大天狗と云ふ人が中々澤山である。今日ては家元にも然様二人、程内弟子も居つて十分に直しますから、段々と確かりしたものが出来るてありませう。併し人に依つては、餘り殿しく直すと腹を立て、稽古を止める人があるが斯う云ふ人はドウも縁無き衆生でつまり本當の稽古は出来ない據ないと云ふの他はありません。

晩學

それから晩年に成つての稽古の事ですが、これも矢張り餘り節に氣を注ぎに小兒の時習ふやうな工合に稽古した方が宜いだらうと思ふ。近頃稽古する人を見るに、謠本に鉛筆で印をつけて居るものもあれば膝の上にて指で節を書きながら謠ふ人もある。併し此の節を書きながら稽古するものは、書く方が手が回らないから緩くりしたものより他には謠へない。早いものは謠へませぬつまりこれもマア眞の手解位のものであります。併し歳老つて修業するものでも、半ヶ年位毎日二三枚づゝ見て貰へば或は極く性質のよい人は十人並に謠るものもあるやうです。先づ普通は大抵三年位はかゝるものです。其の中極く性質の悪い人になるとドウも幾年遣つてもどれほど勉強しても調子の揃はない人もありますから、皆な誰も彼も一樣には云ふことは出来ません。

楠の露

謡曲の數ですか、番組は觀世には本番二百番即ち内か百十番外六十二番別二十八番と他に七番組二百七番であるが、其の中最も新作の楠の露といふは楠公が湊川で討死の前彼の櫻井の訣別と云ふ所で、これは彼の芭蕉翁の句に

なでしこにかゝる涙や

楠のつゆ

と云ふ句を取て拵へたと云ふとて楠公の家來が小楠公を連れて湊川に行つて父子に對面する所を作つたもので、此所で正行が正成に太刀と巻物を貰つて別れる所で、正行は父と共に戦死しやうと云ふ、正成は叱つて歸へすと云ふのであります。が、どう云ふものか能としては餘り實はない方でありますが、然し一寸と見所は

あります。

御國の光

それから近年の作で御國の光と云ふがあります、これは觀世家で出来たものではなく、毛利公爵が拵へた謡で、夫に梅若が節をつけたもので二十七八年日清戦争の能であるが、シテが中將でシテツレが總督官：戦勝の喜を總督官の前で述ぶるといふので、たしか先頃梅若が一度演じたことがあつたらうと思ふ。又征韓の役といふものも出来て居るが然しドウしても今日の作には自から新らしい言辭も這入て……耳馴れぬ加減か何所となく興味が少ないやうに思はれる。

盲目の謡

夫て最も困難なのは盲目の謡であり、謡の中には随分困難な云ひ回し

もあつてお話しただけではお分りにならぬ所が多くあるですが此の
 盲目の音と云ふものは殊に謠ひ難いので困難中の困難であります先
 づ弱法師だの景清だのと云ふ盲目のものでありまして此の時用ふる
 面は能く見えるやうに出来て居つて、そして眼を閉て謠ふものですが
 眼の開閉に依つて音調が違ふもので眼を閉て謠ふと何となく陰氣に
 なつて来るが併し斯う云ふ所はこれを開別る人も名人でなければ分
 らぬ。當今これを開別るものは先あ梅若か寶生位でせうか此の間實が
 弱法師の囃子を務めた時杖を持って立てからも眼を閉て居つた、トウト
 ヲ終りまで眼を閉て居つたやうでした、彼れがなか／＼の名人でなく
 ては出来ない足の運方も眼を明いて居るやうには到底舞へないもの
 です。



繪畫の將來

畫伯 橋本雅邦君

當今の繪畫

昔の繪畫と云ふものは繪そのものが十分整つて筆力勇健氣韻生動の
 ある繪畫を尊んだので其の描き表はす人物の時代の風俗と云ふ事に
 は殆んど頓着しなかつた、これが近來大分八釜しくなつて來ました、何
 でも時代にヒツタリ合ふ畫でなければ理窟に適はないと云ふのです
 が併し昔の繪畫にも確に一理ある事で繪畫と云ふものは、サウ實物を
 其の儘に寫すだけではドウしても繪畫そのもの、勢ひが見えない繪
 畫そのものを活動させる、所謂生動て居る畫を描く場合には或は繪噓
 事となつても止を得ぬ事がある例へば馬の飛躍圖を描く場合の如き

前へ突出した足又後足の釣合等實物より比較して見れば或は長過ぎ曲がり過ぎるも、繪畫としてその馬の飛ぶ勢を十分に描きたい場合は實際其物の骨格は外れても據ない事である然るに當時は種々故實と云ふ事に束縛されて居る是は至極結構の事であるが夫れにのみ皆な念が這入て居るから、ドウしても氣韻生動と云ふ事を忘れ其時代等の事を専ら詮索して形装に當倣て描く工夫にのみ汲々として居る故に繪畫の上の最も肝要な所を次にするやうになつて來まするから、それでは繪畫の本躰を失つて仕舞ふやうな事にならうかと思ふ、つまり形状を整へて描くより他に仕方はあるまいと云ふ人もあるが、故實を調べて書く事は、それは然る可き學者に相談をして描きさへすれば、故實と云ふ事は分らぬ事ではない、それは差當り出來る事であるが聞たり見たりして容易に出來ぬと云ふは例へば線を一本描いてもこれは素人が引いたものでないと云ふ自然の筆力がありませぬければなら

ぬ、其の譯は形だけ整つたとしまして、如何にも描き顯はしたものの、人物なり又は山水なり、品位と云ふものがなくてはならぬ、古名畫は形状として多くは不満足ではあるが品位は確かに供へて居る故に人物でも馬でも前にも述べた如く前に投出した足など、實物寫生で描く日になると勢がなくなる據なく繪畫事で形は嘘であるけれども意氣を描くやうにしなければならぬ。サウかと云うて實物を知らずして遣るは不可ない總て原物に明るくなければならぬ眞正のものが道具で繪畫としては定まりのないものです、要するに畫と云ふものは一種別にあるものとしなければならぬ、畫は原物がもとかたであるから原物に倣ふより他は仕方はないとすれば、これは西洋にも行はれて居る致方であると思ふ、西洋畫中の人物に往々見ますが何か物を振上げて打つと云ふ形が、餘り寫生である故に突立て居るやうに見えるものがある、これは畢竟畫の氣韻と云ふ方に心持が薄いからア、なつて來るだらうと

思ふ。繪の品位と云ふものを人間に譬へて見ると、人間は活物であるが教育がなければ畜生れたましの成育者で、それて今日の仕事をすると云ふとは出来ない、つまり教育と云ふものを充分に積み重ねて後機に應じて自然に出て来た者が活た物である、例へは商人でも一錢に物を買て一錢二厘に賣ると云ふ事だけ覺えたては不可ません、つまり眞の利益と云ふ事は時に臨んで變化をせなければなりません、覺えた事は腹の中に呑込んでそれが自分のものになつて来て始めて賣買の間に立て利益を得られますので、繪畫もやはり畫の道に覺えたからと云うてソツク其の事を用ふ可きものではない、夫からは自分の考へて描くものであります、結局覺えた事を忘れなければ自分の者にはなりません、是が至極六ツかしい、修業であります、是を忘れるには畫題の意を最も厚く考へ修めた事が知らず、自分となつて畫面に現はれるのが眞の

繪畫であります。

繪畫の變遷

繪畫の變遷もナカ／＼種々な事情に依つて色々に變遷するのですが、御維新後の状況と云ふものは諸君も御承知の通り狩野家も末になると随分悪い弊があるから、愚案ながら自分の氣の注ぎました事は改めて行かうと存じて、稍や改良をした積ですが昔は素人から相當の評を受けても夫を聞き咀嚼て考へ、悪弊を矯正して研究すると云ふ事はなかつた、畫工は畫工社會で自惚て遣つて居りますから變つた事は出来ない、若し素人が評をした所が、素人が何を知るものかと云つて、門外漢の評は受付なかつた、斯う云ふ風に畫工社會で規て居りました、今日の時世になつてはなかく、サウ狭い心持ではならんと自分は頻りに識者に就て及ぶ限り研究して居ります。

其癖を習はず

私の考へる所では繪畫と云ふものは一通りは繪師に就て修業もしなければなりません。其の師匠の繪畫に自淑して居つても、これは同化されると云ふとは必ず害になるものと思ふのです。先づ一通り繪畫を描く事が出来るやうになれば、夫からは當今の美術家及び學識のある人の意見を聞いて見ますが、大變宜らうと思ふ。總じて癖が付ないと自然高尚なる地位に至るとが出来る。故に畫工は獨の人に永く就く要はない。詰り子弟たるものが師匠の心を汲み此の人は斯う云ふ心持を以て畫を描く人だと云ふとが自得ならば、一種他の流派の先生に就て教を受たが宜からうと思ふ。所謂師其の人の長所を探り、短所即ち其の癖を習はずと云ふ風に遣りたい。

是眞の雅量

是眞と云ふ人は餘程廣い遣り方でありました。昔の畫の教授法と云ふものは各々師家に依り不完全ながら規則がありまして格を破つたものは容赦なく破門すると云ふやうな譯であつた。私共の塾中で一寸と文人畫でも遣つて試ると直ぐお眼玉を頂戴したのであります。是眞と云ふ人は其の世中に於て修業した人ですが、あらゆる畫家に入門して居る。狩野風を究めて又土佐風を遣り、文人畫も描けば浮世畫も描ける。是は大變宜い事であらうと思はれる。斯様に研究した諸流が眞に混ずれば猶ほ一層宜いのであります。修めただけで其修めた者が自分に混じて顯れなかつた。夫れは人物なり花鳥なり畫題に依て覺えた流派に合せて描いた心持が見へます。結果土佐家風も描けば四條風も描き、其儘に描きましたのであります。所が其の忤の眞哉と云ふ畫師

が、モ一親父の許に居つて立派に書が出来るのに私の所へ弟子にして呉れと云つて改めて遣つて來ました其所で私はドウ云ふ譯であるか真哉に向つて立派に遣れながら別に師匠取をする必要はあるまいと云つた所が私の親は矢張廣く學んだから私もこれを宜い事と思つてお願ひに出ましたと云ふから何しろ威心の心掛であると思つて置きました、惜しい事に真哉は早世しましたが、書家の心掛は結局斯くありたいと思ふ。

昔からサウでずが、一寸と繪を見ると誰々風誰々の弟子と云ふ事は假令落款がなくとも大躰分りますが是は書塾中千遍一律師の書風に壓せられて真似て居て、つまり先生の書か弟子の書かドーも往々見分らない書があります、これは非常に今日の時勢に於ては壓制の事と思ふ、つまり皆其の人々の眞の働きの所謂活動と云ふものがなければならぬ所謂天真爛漫たる所に眞の美妙と云ふものは顯はれて來るもので

ある昔は各々流派に依つて何でも夫に引込む主義で遣つたものであるが、今日はサウ云ふ壓抑の爲に伸る手を縮めてはならぬ、サウ云ふ譯であつて、極く平たく申せば、書と云ふものは教ると云ふ事は出來ない、私は弟子に接しまして古ひ事でも知つて居る事は斯う云ふ事は良い、斯う云ふ事は悪いと只話をして聞かせ段々用墨用筆に馴れ圖取を覺えて來た人々には是からは自分獨りでお遣んなさいと云うて突放して本人の自力を試る實際描いた書に指が六本あるとか云ふ場合には、夫は不可ぬと云ふが、モ一少し袖を此方へ寄ろとか手を伸せとか云ふ事は、それは教ゆる事ではないと思ふ、能く私の宅に來て書を見せる杯、云ふ人があつても私は斷然見せない事にして居る、若し私の書を真似やう杯と云ふ人であると私の癖を取つて害になるから自分は決してサウ云ふ事をしません、ドウか書と云ふものは十人寄て各々顔の變るのと同じ事に變らなければならぬ、決して一定すると云ふ事はない、各

各其の人の氣質に依つて面白みを持ち、其の畫が生てさへ來ますれば、自分で描いた畫は自分の特色を發揮して、假令落款がなくとも、各々違つて誰人と確に分る位にならなければならん。

總て畫の描方は、仕方からして修業して行かなければならんが、それは見真似をして遣つても宜いから、これにて將來は世に立つものではない。これは自分の力が顯れる迄の道中であるから、能く修業して後ち自分の考へてばかり遣らなければならんと云ふ目的で修業すれば宜しいが、只差支のないやうに物を修得て置くこと云ふ單純の遣方では行けない、それで萬物の形を修得ると云ふとは、自分の力を拵へる道具で、能く形が修得つて來れて、自然と眞の力は出て來るものである。

繪畫の將來

或る西洋人が日本繪畫の線を見まして、實際人物の衣紋に斯様の線は

ないと云つたされば、西洋人からはサウ見えるてありませうが、元來日本畫と云ふものは力を入れる所は線にあるので、その太くなりたり細くなりたりして畫をなすものである。又日本では其の線のある畫に馴て居るが、始めて此の日本畫を見たら變なものに思ひませう、併し線と云ふものは何所までも存して置たいが、只線の描方を改良して遣らなければならんと云ふものは、例へば着物の皺にしても線から出來る、これも光線が強くてその物身に映ずる所は悉く細い線でかくとか全體の光線に對する工合によつて線の太い細いが出て來るやうにしたならば、實に旨いものにならうと思ふ。歐羅巴では線は入らないものとなつて居るが、油繪でも名人の描いた畫は、着衣の折れ方が矢張り日本の線畫と同様確かり描てあるが、下手の人の畫はメチャ／＼になつて多く胡麻かしてあるのであります。結局日本畫の將來は大に線の改良を施こし、これに伴ふ着色も夫れ／＼變つて來なければなりません。これが

は時勢に伴うて變遷するものと見るの外はありません。

古永徳の活潑

抑も書は時勢に依つて變つて行くもので、今申す如く將來もサウなる譯でありませう。昔し元信があれ程手堅い書を描いたものだが、孫の古永徳と云ふ人は時世に染み自然活潑に趣いた人である。古永徳は太閤に愛せられ桃山御殿の裝飾畫も描きました。がその筆力の働け方實に元信の家から出たと云ふは怪まれる位活動して居りました。これは矢張太閤の氣質を永徳が能く取て氣に入るやうに描いた結局其の時世に適せたものであらう。これを今日評したなれば時勢に阿諛ると云ふ人もありませう。がドウしても其の時世に伴ふと云ふが本意である。後世から一々評をするのは随分酷な事である。兎も角も日本畫は線の上を改良を施し時世に伴れて變遷して行かなければなりません。縦令

ば遠く天平藤原近くは鎌倉徳川時代の如き、建築の變遷、風俗の變化、裝飾の嗜好等各々異なるは勢ひ止を得ざることにして、繪畫變遷もこれに伴つて行くものと思はれます。

畫論

畫 伯 今 尾 景 年 君

繪畫の談話でございますか。私は至つて訥辯で十分に自分の思ふ處を申上るとが出来ますまいが、折角のお尋でございますから、いさゝか平日考へてゐる處を申上げませう。

青年畫家の邪道

今日の青年畫家は概して筆墨の鍊磨といふとをすて、たゞ寫眞的に西洋的に光線がどうか遠近法がどうかいふとばかり苦心し

甚だしきは寫生といふので諸所を寫真にとらして夫を引延して描て居るのもございます尤も光線や遠近法のとを注意するは至極結構なとてでございますが之と同時に筆墨の鍊磨といふとを忘れてどの畫もどの畫も皆へろくした軟弱な淺薄な筆ゆきて墨色などいふものはさらに出ず一寸見た處は新らしうも見へますが元來筆墨の妙味といふものがございませぬからずつと見ると興趣索然でありまして床の間にかけるとたゞ騒がしいのみで到底收まりがつかませむかゝる畫は百年五百年の後などいふは扱ひき半月も生命を保つとが出来ぬ畫でございます。

然るに此惡風が滔々として青年畫家を溺らし相率ひて濁浪の中に浮沈せしむるのは吾畫界にとつて實に慨かはいとてございまして私も門人其他に幾度か戒告致しますか何分青年のとなとて何かなしに流行的にやらぬと時世に後れたやうに考へ違へをして眞實に筆墨の

正道に立還るものが殆んどございませぬ。此調子で参りましたならば日本畫の妙趣といふものは殆んど亡滅してしもふのでございます。

運筆と寫生

然し此惡流行も其中に止む時がございませうし青年畫家もいつか眼が覺るでございませうが私共の考へる處では繪畫をやる者は第一が運筆でこれを十分に練こみ寫生に骨を折るのでございます。運筆が熟して寫生が自在に出来るやうになつたらば其次が意匠でございます。意匠の方は書籍を讀んだり多く古人の畫を看たり追々修業を積むに従つて畫境といふものが廣くなつて自からいろくの考へが出るものでございます。然し此運筆と寫生が十分腹の中に入居らんと假令いかに高妙な意匠があつても之を筆墨の上に表顯はすことが出来ず表顯はさうとした處で例のへろくした軟弱な淺薄な筆ゆきては到底

其目的を達する事が出来ず徒らに人の嗤笑を買ふに過ぎないのでございます。

それならば、運筆が熟して寫生が出来て、そして意匠さへよければ畫家の能事畢るかといふに、なか／＼さうでない、次には精神の高潔といふとが肝心で、いふに、世間には畫は至て上手であるが床へ懸けるとあさましが悪いといふのが随分ございしますが、之は其畫家の精神に高潔を缺て、無暗に潤筆を食ぼるとか或は俗界の毀譽になづむから、其中にも潤筆を食るといふのが最も畫の害となります、元來繪畫は畫家が其精神を残して置くもので、筆を把て絹紙に向うては専心一念、たゞ其上に精神を打こんでもなか／＼自分の思ふやうの畫は出来ないのでございしますのに、況して潤筆の多寡によつて加減しやうといふやうな卑劣心がありましては、到底よい畫の出来る筈がなく、後世に残つても空しく自己の醜い精神を人に見られるだけのとてございします。

畫は精神

それてまた時世によつて繪畫の品格が違ふやうに思はれるといふのは、昔と近世と比較して見れば、畫家の技術彩色の使用などは餘程進歩してゐるに相違ない、然しながら床の間に掛けて比較して見ると、近世の上手名人の繪畫も、古人の畫の品格には及ばない、古人の畫は至極不細工で、ざつと描てあるが、夫て巧者に描た近世の畫と比較すると、自から品格の違ふといふのは、これは畫家其人の精神の持方が違ふからである、現に雪舟、秋月、元信、等伯などのものと、應舉、吳春といふやうな畫と比較して見ると、夫は何方も名人の畫で、悪からう筈はないが、どうも境界が一段別なやうに思はれる。と云ふのは、雪舟あたりの時代と云ふものは、世柄も格別ではあるが、畫家も仙人界に居るやうな心持で、潤筆など云ふよりは、第一本人が氣が向かなければ描かぬ、そこになると應

舉、吳春などの方は畫としては立派なもの即ち技術から云へば大したもののであるが精神の持方が昔のやうにゆかず従つて自から境界が別になる、況して應舉、吳春時代から今日になつては世上の風潮が十倍も峻峻であるから畫家たるものは餘程自重して精神を高潔に持ぬと到底其畫を大成して名人の域に入るとは出来ぬです。

光線意匠は第二

何に致せ今日青年畫家は概して其方向を誤つて居るいかに巧妙な作戦計畫があつても、兵士にして脆弱不熟練のものであれば左右進退が合期せずして一敗地に塗るが如く、運筆もろくく出来ぬものが只管に光線の意匠のと騒いでもそれは何の役にも立んではす。それで吾々の望む處は須らく筆墨の正道に還り、まづ此兵士を訓練して後に順次其他を講究すべきものと思ひます。訥辨でお分りにくふございませ

うが、まづさつと之が私の持論でございます。

繪畫の將來

畫 伯竹内栖鳳君

日本畫は早洒落

御尋の繪畫の將來と申事は中々大なる問題で定まつた考としては素より無いので、いさゝか目下の所感を申上ませう、日本畫は基礎を十分に立ることを勉めずして早く洒麗るといふ傾があつて其洒麗たものを次でに傳へて、遂に形式といふことを云はるゝ迄になつた其素を忘れた點があらうかと思はれます、其中又洋畫の及ばぬ特色を備へて居りますので一時は土佐に狩野を加へ、光琳に四條を折衷して新なる一生面を作らむとしたともあつたやうですが、今日では根元とする實物の自然なる有様に對して、精透なる觀察をした上ならでは到底善きもの

出来る筈は無いので古人の名作を見ても其畫を一遍實物へ戻して其實物に着きたると離れたるとを問はず其名作を成せる道理を知るに非ざれば其人の癖を知り得るのみで製作者の益にはならぬ事となりて古人の一生面を開ける人には皆此自然の觀察に基かざる人はない。

基礎の研究

西洋畫は一々モデルに依らざれば畫かず又畫けぬ様にも成つて居る勢ひ彼寫真と分ち難い様なるものも出来る弊がある畫學の初歩といへば石膏で作つた人間の手足などの骨を實寫するので畫を書くまでには中々下ごしらへの研究が必用なので一寸見た處では此下ごしらへに終日は暮れはせぬかと思ふ斗りである然し實に感心て其基礎の上に周到綿密なる研究を順序に爲せる事は日本畫の將來に向うて大

なる必要であると思ひました光線を教ふるにも晝間燈火を用ひ又實寫と申しても其物昧の性質を顯はすに非ざれば完全とは云へぬと申事で色を工夫するには繪具も都合よく出来てある然しこれは金これはガラス是は陶器とそれ々其性質を見せるに局外者の感服する程の苦心は無いので繪具の功も多い事のやう思はれる或人が洋畫を學で林檎を書きました時に透明なる林檎が出来たといふ笑ひ話があるので日本の畫には怪我にも透明なるものは出来ぬ全く繪具の關係少なからず洋人も決して斯様な事のみを力を盡すには非ずして之は畫を書く一端の研究此少部分の研究を積み大なるものを作らむとの彼の性質で博物館杯には大作逸品が澤山あつて日本の畫をかくものは續々行て見ねばならぬ事と思はれる日本畫に關しては洋畫は唯一の参考品で日本畫の長所も短所もこれに依りて始めて正しく判然するので今後の研究工夫は此長短を明かならしめし後ならでは其の

進歩とは見る事は出来ぬ。
 追々西洋畫も見らるゝの便宜ある時勢に遷り従來の日本畫に洋風の
 光線をも試みむといふ有様種々遣つて見たいものであります。洋畫
 に於て光線を用ゆる事は日本畫に用ゆる如き添物には非ずして秩序
 ある歴史を經此光線の強弱向背の變化に依り千變萬様の畫風を成し
 畫の趣味に密着したる關係を持つて研究を重ねたるもの其作品を寫眞
 くらゐで見れば左程にも感せぬが親しく接して見れば高妙なる趣あ
 る光線の用ひ様をした佳作が澤山ある。又餘り光線の用ひ様が工みに
 過ぎて下品に見へ、纖弱に流れて徒らに光線を弄したる畫といふに止
 まるものもある。私は近代の人々はミレ、コロ、なといふ人の作品に
 感心しました。重き繪具を用ひて淡雅なる用筆と滋味ある色つかいて
 林頭を渡る秋風落葉の下扁舟に掉させるもの農夫の晩鐘に禱れるな
 と意簡にして情充ち溢れむ斗りて光線の用ひ様も緩和であつた。又ド

ラクロワのダンテ神曲中を寫せるもの着色沈厚で深刻に見るもの、
 身の慄はるゝ思ひがする何れも作家相應の特色を備へて居るそれで
 日本畫に洋畫の光線を用ゆるといふても白い處と黒い處を付加へて
 和洋折衷といふが如き皮相な事は彼洋畫の光線の用ひ様の工なるを
 寫眞と見て實際を知らぬからて彼の最も發達したる部分へ向うてこ
 れに伴ふ繪具の完からざるものを用ひて工夫するも勞多くして優る
 もの、出來る筈なし。洋畫の方法中光線は生命ともいふべきものにし
 て日本畫へ參酌すべきもの此光線のみに限らざるべし。又光線を取る
 に先其光線の道理をのみ込まねばならぬ。のみ込みたる其上にも其作
 者の目的結構に従ひ其向背變化を程善く按配して面白みを成し情趣
 に沿ひて深達なる感を引き起さしむるに非ざれば益なし。唯、光線の巧み
 を實物と争ひ薄弱なる品位の低き作品を洋畫に往く見る處彼は彼の
 長所に敗れたるなり。

想像の力

書に最も大切なる想像の力、これは日本畫に發達して居る活動か輕妙で能く精神が透徹し且簡單に情趣の至れるの作は想像の力に依らなければならぬ、ターナーの畫けるカルセージ開港の圖中へ小兒が玩具の船を持つて居る處を加へたるを、ラスキンは高遠なる意味を想像させる好意匠なりとて非常に賞讃せるも、日本畫の方よりは始終想像の足らざるものは畫に非ざる様の習慣を成せるが故に、左程には思はず一寸した歴史を畫くに例へば仲國の小督を嵯峨野に訪ふて馬上笛を手にせるは實際あり得べき事に非ずして想像の方より付加へたるもの事小なれども意は一なり、此想像と寫實との調和に就ては深き思考を要する事のやう思はれる、全じターナーの畫にウリセスがポリフェムスを嘲弄せるといふ畫がある、此筆者の特色なる光線色彩の頗る巧

妙なるは色彩豊富多味申迄もなく、實寫に長じたる近代の風景畫を見る心地せらるゝ圖中の雲の中より大なる手や顔が出て居る素より奇怪なる話しを畫くにせよ、他の部分が餘り實寫に巧なる爲異様の感じを起して善くないやう思はれる、一ツは習慣にもあるかもしれないが却て伊太利古代の作品緩和なる光線の畫には想像が善く喰ひ付て居る様に思ふ、美術としての眞情に二つは無いか、東洋は東洋らしき畫に發達するか道理である様に思はれる、基より想像というても圖案の上のみならず、即畫全體の上に想像の多い畫と少ない畫とありて畫風の種々分るゝのは此想像の働きのいうてよい。

西洋畫といへは油繪である、バステル水彩等種々方法も作られて居るが、何れも油繪についたもので、日本畫は此水彩方面に發達したので、彼は濃厚に周到に我は淡味に輕妙に、彼は繪具に我は筆勢に、彼は寫實に我は想像に發達し、彼の水彩畫は小品ものを成すに止まり、其變化日本

畫の如く自由ならず日本畫の方に墨畫淡彩濃彩と又線とつけたてとの問互に融通化合して洋畫に比し簡約に氣合調子を應用して剛勁なる畫も流麗なる畫も出来る様に所謂一間の座敷を何に用ひても差支ないといふ工合に方法の組立が異つて居る、そこで日本人が洋畫を見ればくどく、敷て不用の部分に迄力の入れ過ぎてありはせぬかと思はれ洋人が日本畫を見れば物足らぬ心地して遠近法なども蕪雜て目に入らぬ部分も多からうと思ふ、こゝで日本畫の方にては是迄の方法は方法として此自然の實物に對する觀察に力を入れて寫實と想像は調和に工夫したいものです。

墨畫の妙美

夫て私は日本の墨畫といふものに注意して保存もし發達もさせたく思ふ、洋畫にも鉛筆やペンで書く畫もあるが夫に比し餘程不審議な働

きを持って居る變化が自在であり實物に着き過ぎて厭はしき感じのする部分を避けて所謂神を寫すといふ要所に向うて非常な力をもつて居る洋畫にも可成色を減じ又は一色で畫いてあるも此主意ならむか、私は墨畫と淡彩との間に猶微細な工夫をして見たく思ふ。

眞理の探究

そこで歐州人が繪畫にせよ彫刻にせよ大作といふもの澤山あつて骨を折り身をいれて長日月飽かず作り上げる處方法等に秩序ある事など感服の外は無、如何に方法が善くても便利でも眞情のこめられたもので無ければ實際其價値が無い、何事も道理の開けゆく世の中繪畫上の事に就ても從來ある固陋の見を拆け眞理を求めて基礎を正し、一心に製作するのが今後の大事な處で、餘り手法の一端の折衷にのみ狂するは宜しからざるべし、何分歐洲は連邦の事とて相往來して磨き合

ふ便利もよく、國際上の歴史も其關係廣くして圖題の如きも、ナポレオンやルイなどの大戦争を宮中に書いて、人民をして追懐せしめ鼓舞せしめ、其他道德に教育にも及ぼし其時代の社會に因縁深く偉大なる感しを起さしむ又細少の部分にも意を用ひ風前に於ける最終のマツチなどといへる一刹那を寫せるものなど、其區域の宏く作られたる様思はる、それで日本畫も竹林七賢や七福神といふ事は二段にして我國の事は素より異境の風光作品をも見て圖題を博くしたい自然の實觀より出る工夫が第一です、畫風も自然に多様に分かれるが宜しい日本では一寸書方が變れば直に攻撃が先に立狭慮な事です皆思ひくゝに遣るがよろしい此頃は京都などの展覽會の列品には八分以上人物畫に成つて居るが、花鳥も怠らぬ様畫きたいもの私が佛のゼローム氏に面會せし時の話しに花鳥の活動を始めて見出したるものは日本人なりと云はれた其八分以上の人物畫と申てもとても歐洲畫の如き研究に依り

たるものに非らず、骨格といひ表情といひ到底彼に及ばぬ作である又ゼローム氏の語中人物動物は日本畫は未眞の研究を踏みて居らぬとの説、洋人が馬の足どりを寫生するに其馬の歩む度に應したる車を造つて馬と並行せしめて寫生せし事あり、馬を善く畫くやうに成つたのは近代の事なりとて其苦心の談あり、敬服の外なし、里昂の畫の博物館の壁に畫ける、ピポードンヤパン作、宗教畫これが所謂日本の鳥目法といふ圖の組立て些細な光線を用ひず何處やら近代の色の用ひ様で古風に倣ひ、大手で剛勁なる筆調と手腕の自在なる處、日本狩野家名家の作に對するの感にちかし、筆墨は未技なりとて一概には棄られぬものなり、日本畫の將來に就き餘り前途を照せば、反て足元が暗くなる唯自ら見た事考へついた事を畫いて見るの外は無、尙申上たい事もありませんが、他日また重て拜眉の節に譲ませう。

繪畫論

畫伯山元春舉君

美術の御話ですか、かう云ふ御話せば其奥の手を御話するのは、丁度宗教の御話と同じ様で、中々話し切れぬとて、殊に我々など一向無識で御耻かしき次第で御座ります、然しながら折角の御尋ねに付自分のわからぬながらの愚見を御笑い草迄てに申上ませう。

繪畫の着想

はい私くしの着眼ですか、所謂彼岸俗に目的ですな、夫れは先づ或圖を描かんとて絹素に向ふた時は、人を忘れ我を忘れ筆を忘れ己を空にし無念無想の間に不識く畫中のもと同化すと云様な所が美術家たる者の最も尊むべき所かと思はれます、例へば百花爛熳たるの所を

描いて春風面を吹くの感を起させたり、枯林蕭條たる所を描きて秋月心を照すと云様な心持を起したり、其他青梅を描きて酸ぼく煙を描いてけむたく正成を描いて同情の涙を流さすなど、皆此境界から得るものであらうかと思はれます。

然し是れは餘程幽深なる大乘的の御話して、中々我々はさう云ふ譯には参りませぬけれど、先づ斯云ふ所を般若波羅密とし何んでも彼の岸へ行かうと思ひ研究しつゝあるので御座ります。

繪畫の教育

はい教育の方針ですか、是又中々六ヶ敷事で彼の「春雨の分て夫れとは降らね共受る草木の己がさまく」と云ふ歌の意と同じとて大體教ふる者より習ふ人によるものでござります、その證據は名人の弟子は皆々名人に成りさうなものであります、がさうは参りませぬと云う

て捨て置きますれば獨生のいびつ計り出来ますから、餘程氣骨の折れるもので御座ります。先刻申上た様な大乘的の方針を初進の者に用ゆるは宜敷ないかと思ひます。又用ひた處が精神的の事ですからつかまへ處が無くてさつぱり分らぬです。夫て矢張り秩序を立て曰はば小僧に經を教ゆる様に順々に其人々の程度に合して教へて行終に直覺的になる様な工合にした方が宜しかと思ふです。

夫れて矢張り始めの間は技術を十分練磨して置く方が宜敷かと存じます。是は謂はゞ他日良將の指揮の下に在て、左右進退を自由にする兵士を訓練する様なものであります。

此頃世間で随分ヤゝ技術は未技だとか何とか彼とか云ふ大ソゝ筆の活動を卑しむ様な議論が御座ります。是れには私くしは少し服し兼ねます。最も一日に百枚描いたとか或は此筆をかう使ふとか、殊更に筆力を現はさうとか云様な者は筆に執着したもので畫の三昧に入らぬ

ものですから誠に卑む可き者で世界を生み出す美術家でなく、世界に生み出されたる一つの活版器械に外ならぬ次第であります。彼様なものは技術といふ方へは私は更に算入せないので御座ります。私の考へては今茲に假りに馬の圖を書くとしませうが、そして其筆者の理想が狂瀆の如く奔騰し來る處の情を現はさうと思へば、已てに其着想は出來たる者と云てよいでせう。而して其れを紙面に現はすに付ては、ドウしても技術の力を借らなければ躍然として動く様には見へませぬ。着想々々と云うて技術のない畫は、筆者其人自身は得意でありまして、他から見ても誠に見悪いもので御座ります。畫家として着想計りて技術を取つて仕舞うたら只理想の高い人と云ふ迄で、せうドウしても畫家は彼の紅葉さんや露伴さんが高遠なる理想を冷腕玉の如き綴文を以て著はされる如く絹素の上に形を以て己れの理想を發揮せねばならないのです。だから思ふに前の様な論者は技術の出來ない人

の自分の位置を保護する爲の口實に外ならぬのであらうと考へられます。

日本畫の缺點

日本畫の缺點ですか、夫れは随分長所もある代り又缺點も澤山あらうと思ひます、第一習慣の弊が餘程あらうと存じます、曾て私が富士の山の中腹で山上を見上げた處を描きました御承知の如く富士の山は三歳の童子でも知て居る様なもので、一度も見ない人々でも一種の摸形的に腦に印して居る譯けて夫れを私は彼の高壯なる豪宕不羈の實地につき寫生し、何んでもかう云ふ情を現したいと思つて拙ながら仕上りました所或る人が之を見て斯んな富士の山は無いと云はれました、其畫の拙劣な點を批評することは誠に結構な事で甘受致しますが、古來よりの一種の錫型的習慣に迷いつゝある人が斯様な批評をしられる

のは實に片腹いたき限りで御座ります、すべて日本畫には此錫型的習慣に執着しつゝあるのが大なる欠點で、是等は追々改良して行た方が佳いかと考へます、例へて申ませうならば彼の御維新前迄は牛肉などは人間の食す可きものでなき様に云うて食て見もせず嫌うたものじやさうですが今日はドーデす上等の宴會などは洋食を澤山に使ふ様ですが食て見れば中々むまいもので御座ります、惣べて味はずに嫌うと云ふことはいかぬ、兎に角一度味うて見た上で果して不味いものだけは食いさいせねば宜い譯けて御座ります、余り在來の習慣を固守せず成る可く廣く觀察して味ひの佳い所を咀嚼するのが、今後日本畫を進歩させる一の手段であらうと思つて居ります。

日本畫の長所

夫れから日本畫の最も長所とする處は直覺的寫意とても云ふ可き處

に在て西洋の様に解剖的に寫生するのでなく、輕妙な筆を以て直ちに其意を寫すと云ふ處などが最も日本畫の得意とする所であらうかと考へます。

先達で或る生徒が極彩色の吹雪に鴛鴦が渚汀に泳いで居る圖を描きまして私に見て呉れと申しましたから、私は是を見て誠によく密に出來ては在るが惜いことには色が出て居らぬと申しました。さうしたら彼れは鴛鴦の標本や實物を持って來て、此通り羽毛の色など十分寫生して描いたのですから、色に於ては間違はない、心算りだと云ました。成程中々密に羽毛など一枚一枚其色に似せてはあるが、これ皆皮想の色に迷ふたもので、たゞ摸樣的に鴛鴦の標本を描た迄で、其思ひ羽などのつや／＼しき、而かも空氣中には吹雪と云ふ現象のあるのですから、尙さら其羽毛のふさ／＼と如何にも活動する様に見へねばならないのです。夫れにさう云ふ情が少しもあらはれませぬから夫れて色の出て

いないものと云ふたので、假令筆數を少くして墨斗りて抽てもかう云ふ情が幾分ても發揮せられて居つたなら色の出てあるものと云うても宜からうかと思ふのです。随分古の名人の抽た所にはかう云ふ情があらはれた畫が御座ります。

て今申した様な墨畫の一笔畫の様な鴛鴦でも動く様に見へたりする所は日本畫の最も尊ぶ可き得色ですから、是等の點は成る可く失なへん様に保護して行つた方が佳からうと思ひます。夫れて先刻から御話した様なもので惣て畫は外形古實の寫生より精神的の寫生か第一で例へば彼の正成を描くのには其時代の武具服裝に至る迄で、古實を十分取り調べて少しも間違のない様に出來た處が、肝腎の本尊が忠勇無二の正成公はいかにも斯様な人て在たであらうと云ふ様な感じが起らず何にやら素性の知れぬ人物が正成の武具を付て居る様に見へては美術其もの本趣にもとるもので例へ墨て描いてもいかにも楠公と云

ふ感じを興へなければならぬのです。全株繪畫と云ふものは只に徒に色彩斗り塗抹して姫様やぼつちやん方の御慰ものにするのでなく、多少世の中の人心を支配する力らがなければ、美術とは云はれまいかと思はれます。以上ざつと御話ししました様なもので、中々美術上の御話しなどは其奥があつて話しされるものではなく、終には幽鳥深谷に鳴くとか、孤猿月に叫ぶとか云ふ様な感覺的の語をかりて以心傳心的に御話せねばならぬ様になつて参ります。

圍碁の話

外務省會計官 段 内垣末吉君

中世後の圍碁

我國の圍碁は織田家全盛の時代から盛んになつたものであつて、織田

信長が京都寂光寺住職本因坊算砂と云ふ名人を度々御招になつて圍碁の御催をなされた之が本因坊の元祖である、其の以前と云ふものは然程熾のものではなかつたらしい、此の算砂と云ふ人は名人であつた、此のころの碁と云ふものは、至つて正直な碁で、只今の碁のやうに石を捨てても勝たうと云ふとはしない、至極正直に戦つて居りますから偏屈な六つかしい碁が出来、併力は強い夫が四代の道策本因坊あたりから追々打方も開けて来るし、丁度天下の戦亂も鎮靜したからして碁道はナカ／＼熾んになつて来た、夫れから世は徳川の水の流れと共に太平に治まりました故に、四代目の道策本因坊は召出されて江戸に出て將軍家の碁所を預り家元となつたのであります、其の頃から段々と碁も盛んになつて来た、此の人の碁には今でも名人が感心するやうな手が澤山ある、又此の最初の石立と云ふ所になると昔は型は面白くない、何しろ昔の人は餘り變つた手を打たないからドウも變化が薄いや

うな感じがある、それが丁度文化文政より天保年間にかけて追々開けて来て、石立と云ふものが開化して来た、其の时分には丈和本因坊と云ふ人が名人で夫れからこれに次いで秀和本因坊、秀策などは、何れも名人で秀策などは御城碁に生涯敗たてがないと云ふ位でこの秀策本因坊の石立と云ふものは、只今でも皆人の學んで居るのであります。それで碁道は段々と熾んになつて来て、昔日の比ではありませんから従つて石立なども競うて研究して見るので、碁道もマゝ此所らが極點だらうと思ひますが或はこれから先きドウ進歩して參つて、今日損の手としたとも亦徳といふことになるか、分らないが、随分今日は圍碁の全盛時代であらうと思ふ。

古人の格言

碁は對手と代りく打つものであるから、始めから勝うと云ふ心得は

不可ん、盤に向つて頭で勝うといふのが、甚心得違である、古人は堅く戒めてある、古人の金言に『碁は負けまじと打て』と云ふ事がある、何でも勝うと云ふのが宜しくない、其の他小敵と見て侮るなとか、種々の格言もあります、要するに戦争のかけひき進退と同じとてあつて此の『碁は負けまじと打て』と云ふ一言で宜しいと思ひます。

定石

碁に能く定石と云ふ事を申しますが、真正に云ふ時には、決して定石といふものはない、手は千變萬化限りのないものであります、時に取りて能き手を定石と申します、初心の人に教ふるには止むとを得ず、これが定石だ、というて教ふるのであります、定石は丁度劍術で云ふ型であるから、夫れから生れて来る變化と云ふものは、自由自在に打て出なければならん、碁は局面全躰に渡つて打たなければならんから、真正に打つ時に

は或は愚な手も時に寄ては名手となり、或は至極能き形でも時に寄つては悪手となることもある、夫を遣ひ分けるが名人上手と云ふもので先づ相手が一つ打つ其の石はドウ云ふ積り、如何なる石立にする積りてやつて来たものか、それを考へて、何所其所までは相手の意に従つて打て、見て何の邊で變化しやうとか、或は最初から向ふの意を潰して斯う打うとか云ふとて態と打つ、スルト相手は自分の計畫した意を挫かれ、ますから、又新に考へて打たなければならん、總て一つ一つ企畫謀略と云ふものは變化して打つものですから、夫で時間が永くなる、サウ云ふ譯で決して斯う打つた時は必ず斯う打たなければならんといふ、チャンとした定規はないが、初心を教授するのに據なく型即ち定石を教ふるのであります。

名人の碁

碁の時間のかゝるとは秀和本因坊と井上因碩と打た争ひ碁は一週間かゝつたが、これは寺社奉行の前で打つ晴れの立合です、碁は一週間の夜は打ませんから、斯う永くかゝつたのです、普通幾ら永いと申ても先づ二晝夜位但し徹宵より永くかゝつた事はありませぬ、私などは早い方で一日に済んで仕舞ますが、當時の本因坊中川なども早い方が、岩崎は滅法遅い方であり、又秀策本因坊杯は永い方で、村瀬秀甫後に本因坊となりました、人は是は早い方でありました、ドも別に制限した時間がないから、假令ひ永くとも相手はつきあつて居なければならん、氣の短いものは夫が爲に所謂根氣まけをするところがある。

名人逸話

秀和本因坊は至つて義太夫が好きでありました、前因に話した井上因碩と寺社奉行の前へ出て争ひ碁を打つ時、夕方家に歸つては三味

線をひいて淨瑠璃を語つて居るので、先代丈和本因坊が云ふのは、今度の碁は秀和が勝だらう、碇に勝つだらうと云うて居つたが、果して打上げて見ると少々勝利を得ました。又秀策本因坊は大切の碁を打つ時は其の前日に遊里に行つて遊んで歸つて、夫から碁を打つたと云ひますが、これは自分の心を發散させて胸中無一物と云ふやうに苦悶のないやうにして、サウして碁を打たうと云ふ考であつたらうと思ふ。又佛法で云ふ安心といふ禪宗の悟りといふやうな心得で常に勝を得たのは秀和本因坊であります。此の人は自分が黒を持って先に打つたから毎手損さへしななければドウしても勝つ筈だと云ひまして決して闘は好まない所が、丈和本因坊は自分が先をすれば、既に機先を制して居るのだから、戦へば必ず勝つと云ふとを申てある、これはマゝ何れも名人の話で名人に至らなければ、ソナ事を云つても行はれません。信州松代の藩に關山仙太夫といふ上手があつた、これは段を取つたか

ドウか分らないが碇に五段位は打つた人だが、この人は面白い癖でいつも下駄がけて歩行く人で、したがつた下駄の鼻緒を何時もチャンと懐中に入れて居る、其の鼻緒が十年ぶりて初めて役に立つたといふとがある、此の人は淨瑠璃が下手の横好で、頻りに天狗がつて居つた所へ村瀬が遊歴に行つた時、仙太夫が淨瑠璃を聞かせやうといふので、得々として語り出したが、ナカ／＼可笑くて聞て居られない、併し仙太夫が一生懸命に語るのて、笑ふ譯にも行かず、村瀬が打俯になつて顔を隠して笑を我慢して居ると、マゝ漸ら／＼のとて一段濟んで仕舞ふと、關山が肩衣を脱がないで、村瀬さんはドウも始終感心して聞いて居た、餘程村瀬さんは淨瑠璃が好きと見える、モゝ一段語らうと云ふので、聞くに堪へない淨瑠璃を二段聞かせられたのは、閉口したと云つて大笑をしたとがある。

閱 歴

私が碁を修業したのは、十一二歳の時からであります。最初は爺父や兄が平凡碁なから好きでありましたので、教へて貰ひ、十三歳の時に雲州の岩田右一郎といふ人に就て修業いたしました。此の人は後に五段になりました。私の就いたのは三段を打つ時でありました。夫から十五歳の時に岩田について國許を立つて諸國を遊歴し、十六歳の時に來て秀和本因坊に就き内弟子と成りて修業いたし間もなく初段を取り十七歳に二段になり、十九歳で三段になり一時國へ歸りました。所が例の長州征伐といふ騒ぎで、濱田は落城し長州兵が石州口へ討て出て江澤と云ふ所に滞陣して居ました。其陣屋に遊んで夫れから山口の諸隊の會議所に滞留して遊んで居ます。内明治二三年頃長州老公の出京の時、木戸孝允公のお供をして出京し同邸に寄食して居つて四段を取り、夫か

ら明治八年頃京都の神官を勤務中社用があつて東京に出て木戸さんの所に居つた。其の時五段を取りました。夫から私は京都へ歸つて神官を勤めて居ると、鐵道局の井上勝さんが云ふのに、ドウダ鐵道に來ないかと云つて呉れるから、夫れぢやア参りませうと云ふので、鐵道に就職して丁度大津停車場の普請の頃彼所に居りました。越へて十二年となつて長崎の船渠の開業式があつて其の時工部卿の井上伯が開業式に望まれるので、長崎へお供をして参りました。其の歸りにドウダ東京へ出て來ぬかと云うて呉れるから、東京へ出たいものですと云つて頼んで置きました。夫れから間もなく出京を命ぜられて工部省へ出ました。が、其の時は既に井上伯は外務省に轉じて後任は山田伯に代つて居つたものですから、間もなく外務省に轉任するとなり、後ち十七年に朝鮮にも参つて例の騷擾にも遇ひました。爾來廿三年間外務省を勤めて居り、公務多忙の爲にサウ碁を打つ時間もなし勉強も出來ませんから

結局私の碁の修業といふものは十三歳より十九歳まで七ヶ年でありました。

碁の 話

家元 本因坊 秀 榮 君

初學者の心得

御承知の通り圍碁と云ふものは通常熱心に修業さへすれば三段の碁打までには容易くなれますが、夫から以上は天稟の才と熟練の二つが揃はなければならぬもので、先づ初學者の人は「師匠の口傳」「作り碁」「盤數」この三つを以て漸々に修業を積むものですが、日々側に居て古人の打方その他種々のとて口傳がある、これを聞いて大に會得する所があつて、夫から日々作り碁を自分一人て遣つて見て、此の手より此の手が得てあると云ふとを考へます、併しこの師匠の口傳や作り碁

と云ふものでは臨機應變の働が旨く鋭くつさませんから、對手を見付ては打ち見付ては打ち、實際の經驗も重ねて所謂番數をかけなければならぬ、此の三つが揃つて實行が出来さへすれば大抵先づ三段迄は進まれぬと思ふ。

書 物

碁を修業する書物も澤山ありますが、先づ碁經連珠國枝觀光古碁樞機佳致精局など云ふ書物が極く宜いものと思ふ、是等を熟讀玩味して打てば、マゝ十分と迄は行がずとも大體の所は悉く分ります。

家 元

舊幕の頃家元と唱へましたのは私の家と林安井井上との四家でありました、夫て私の所は五十石十五人扶持を載いて幕府の碁所を預つて

居りました其の頃井上は五十石安井は二十石十人扶持林は三十石を頂戴して居つた夫で弟子の中で七段迄打てるものが出来ると師匠から上へ願出て新規召出されと云ふので十人扶持を頂戴するがこれは一代碁打であつて家元のやうに代々相續して扶持を戴く譯には行かなかつた夫で家元の世繼は部屋住と稱して矢張十人扶持を頂戴して居りました。

御城碁

此の家元が城内へ上つて圍碁を將軍家の御覽に入れると云ふのは毎年十一月十七日でありました御承知の通り一番の碁にナカク暇の要るもので逆も一日に打されるものでないから夫々手合の相談が濟むと十一日から城へ上つて寺社奉行の指揮の席で前日迄にスツカリ打上げて置いて彌よ十七日には將軍家のお眼通でドン／＼打つ

これは形式で並べるだけのもので何目勝ち何目負けと云ふとは豫め極つて居るものであります此の番組は家元四軒の打人が残らず出て夫に部屋住と一代碁打とが交つて打ちますが時に依ると將軍家の好と云ふので或は本因坊と井上と手を合せよとか林と安井と打て見よとか云ふお聲がかれば其所で兩人は少々打始めて御前を退り寺社奉行の指揮を受けて打上てから勝負の結果を上申すると云ふとて濟んだものであります此の時は一年一度の晴の立合ですから互に鎧を削つて一生懸命で打たものですがドウかすると十一日から十六日迄に打上らないで勝負が附ない時がある此の時には兩人病氣と申上げて十七日の登城をせぬやうに取計つてありました。

盤石

碁盤は榧の木を第一等といたすので昔し御殿に納まつた碁盤は厚サ

五寸縦一尺五寸横一尺四寸と極つて居つてこれに異つたものはお買
上にならぬ此の寸方が規則のやうになつて居りました石も極く宜
い所は白が水晶で黒は那智石で又白は蛤でも出来ず夫で支那では
一方を平たく一方を隋圓に作つて石に表裏を設けて置て打つ時は
づ裏の平たい方を出して打つて能く考へて見て此の石を裏返して表
の隋圓の方を出してモ一確定したとすると云ふ風の打方をやるさ
うです只今日日本では賭碁など打つ連中がこの眞似をして居ります

段

碁の段と云ふものは本因坊四代目道策の頃元祿頃から出来たものゝ
やうに私は考へますがこれは時代に依つて大變強い人の多い時もあり
割合に少ない時もある要するに初段と云うても別に此の位と云ふ確
たる程度もない丁度マ一相撲の幕下とか三段目とか云ふやうな譯で

力の強いものが多い時は従つて段の力も強いものが多くなるのであ
ります私の家は

名人(九段)	全	名人(九段)	全	名人(九段)	全	名人(九段)	全	名人(九段)	全	名人(九段)	全	名人(九段)	全
初代	二代	三代	四代	五代	六代	七代	八代	九代	十代	十一代	算	算	算
砂	悦	悦	策	知	伯	伯	伯	元	元	元	列	察	伯

名人(九段)	十二代	丈
七段	十三代	丈
八段	十四代	秀
六段	十五代	秀
四段	十六代	秀
八段	十七代	秀
八段	十八代	秀
八段	十九代	秀

和 策 和 和 悦 元 榮 市 榮

斯う云ふ譯で名人と呼ばれたものは六人しかありません私の悴の秀輔は若いには似合ず能く打てましたから私も早く世を譲つたのでありましたが不幸にして早世しましたから據なくも亦私が遣つて居るやうな譯で……不幸な目に遇ひました。

電報電話碁

近頃諸新聞に能に見える電報碁ですが、あれはナカ／＼強い方が損て弱い方が得でありまして、迎も正確な勝負とは思はれない、何故なれば互に別の處に別れて打て居るのですから、弱い方は數回打直して見て損が行くやうなれば又考へて外の手を打つと云ふ様な工合で弱い方は素／＼石を置いて打まするからして盤の上で既に地を廣く占領して勿論初めは優勢でありますから、其の上數回考へて打て見て、利益のある手／＼を打つて見ますれば、其の中には、得の手を見出して打つと云ふやうな風にしますから、膝を突合せての手合でなければ迎も真正の勝負とはならないものと私は考へます。

名家訪問錄 第三集終

明治三十六年七月廿二日印刷
明治三十六年七月廿八日發行

名家訪問錄第三
定價金貳拾錢

著作者 石川松溪

發行者兼印刷者 金港堂書籍株式會社

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

右社長

代表者 原亮一郎

東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

印刷所 株式會社 秀英舍

東京市京橋區四軒屋町廿六、七番地

賣捌所 各府縣特約販賣所

不許複製製